

# エース

## 3D DREAM MAGAZINE

【えっちマンガ】

千葉哲太郎

ぱふえ

飛沫おろし

ワス

楠木りん

時丸佳久

今号の  
Special Fetishism Series  
特集

2017  
06

Volume.94  
DIGITAL  
EDITION

感情を持たず、  
疲れを知らず  
無機なる  
陵辱者は  
犯し続ける！

# 機械姦

【連載&読み切り小説】

有機企画×緑木邑

狩野景×ぼっしー

斐芝嘉和×棒糖練乳

なるかく×イチナ

黒井鶴×もう

筑摩十幸×asagiri

あらおし悠×恋河ミノル

一年新×河野雅夫

酒井仁×桐島サトシ

カラー  
ピンナップ



ぼっしー  
冥土黄泉

大林森

（表紙&ピンナップテレホンカード  
応募者全員サービス）

人気PCゲームの最新作を最速ノベライズ

光翼戦姫EXS-11A

# エクステリア

小説 上田ながの 挿絵 宮越良月 原作 Lusterise

## 試し読み版

18  
未満





市民を守る正義の天使も  
機械に捕らわれ無機質な  
陵辱の餌食に！

# 機姦天使 セリエル

魔種の妊辱

小説 かりのけい 狩野景 挿絵 ぼっしい



「うわあああつ、た、助け……て……くれ……」

休日のゲームセンター。楽しい賑わいに満たされているはずの空間が、阿鼻叫喚の場と化していた。

『お前たち有機生命体は我々デモンシードが同化融合しマテリアルとして活用する。抵抗は無意味だ』フロアに設置されたすべてのゲーム機が禍々しい変形を続けながら、人々に襲いかかっていた。パーツやコードを自在に蠢かし、逃げ惑う者たちを捕らえて筐体の中へ引きずり込んで行く。

「い、いやだ……、頭の中に、入って……くるあ」蠢く機械に取り込まれながら、泣き叫ぶ人々の表情が次第に虚ろになってゆく。

「人がゲーム機に……機械に食われてる?! 機械の一部にされちまってるっ! 逃げろっ!!」

「だ、だめだ、周り全部、機械だらけだ。取り囲まれてるっ! 助けてくれ。ああ、神様っ!!」

人々を同化しながら肥大化し増殖する機器に退路を阻まれ、残った者たちも為す術なく飲み込まれて行く。恐怖に怯えながら彼らが天に折ったその時、

「聖なる雷よ、悪魔の種子に裁きの鉄槌をっ! ホーリー・サンダーッ!!」

激しい雷撃が、異形と化した機器を貫いた。

『雷属性神聖法術による攻撃を確認。損傷率六十パーセント。有機体同化の継続不可能。見敵……、神聖霊体と認定……』

焼け焦げて動きを止めた筐体の中から、取り込まれた人々が這い出してくる。

「た、助かった……のか……?」

「あ、あれは……天使!!」

彼らが安堵に胸を撫で下ろし見上げるその先、エントランスの吹き抜けから、光に包まれた少女が、長い青髪をはためかせて地上へ舞い降りてきた。

ピンクのレオタード風衣装を纏った身体は、神々しいおやかさを醸しながらも、肉感的な胸の膨ら

みを惜しげもなくさらけ出し人々の目を奪う。

慈愛深い笑みを湛える目鼻立ちのはっきりとした美貌は、気軽に話しかけたくなるような親しみやすさに溢れている。

「私は雷天使セリエル! 電脳システムと融合して人の世界に混乱をもたらす悪魔デモンシードを完全消去するため、この地上に赴きました」

「本当に……天使なのか……」

「デモンシード……。ゲームやつてたらいきなり筐体が襲いかかってきて俺を飲み込んで……。そうしたら頭の中にたくさんさんの恐ろしい意識が流れ込んできて……。悪魔が、機械に宿るのか……!!」

異常な現象に見舞われながらも、信じられないといった様子で、助かった人たちが呆然とする。

『神々の尖兵……雷天使セリエルの排除を優先とし、有機生命体の同化を再度実行』

雷撃を免れたゲーム機たちが、破損した機器を切り離して一斉に向かってきた。

「残りを片づけます。皆さん、私の後ろへ!」

格闘ゲーム機のモニターに映るキャラたちが、怒声を上げて威嚇する様に、人々が怯えてセリエルの背後に避難する。

クレールゲーム機がクレールを触手のようにのたうたせ、メダルゲーム機が弾丸のようにメダルを乱射しながら金属の軋み音を響かせて突っ込んできた。

「罪無き子羊たちを、悪しき災いより護りたまえ、ガーディアン・パルス!」

電磁のカートテンが人々を包み込み、機械からの攻撃を弾き返す。

「いきますっ! はあああつ!!」

天使の足が軽く地を蹴る。しなやかな肢体が弾丸のように跳躍した。短いスカートのはためき、ぽつちやりの尻の丸みが垣間見える。

「せいっ!」

空中で長い脚が一閃し、鋭い蹴りがデモンシードの突進を迎え撃った。

『ガギギッ!』

キックに乗せて電撃を流し込まれ、異形の機械が動作不良を起こす。

撓むな乳房を揺れ弾ませながら、セリエルは両手を十字に交差させた。

「機器を侵せし邪悪な種子を祓い浄めんっ!」

天使の両腕が青白い電光に包まれた。

間髪容れずその両腕を鋭く振り切る。

「セイクリッド・スパークッ!!」

「ギイイイッ、ガガガガッ!」

激しい雷撃が放たれ、悪魔に侵蝕された機器が断末魔のような軋みを上げて焼け焦げた。

「さあ、皆さん、今のうちに建物の外へ!」

焦げた金属とオゾンの匂いが立ち込める中、セリエルは囚われていた人々を逃そうと出口を指さす。

「私は他の階の悪魔を浄化しに行きます!!」

上の階からもデモンシードに汚染された機器が暴れる音と、恐れ戦く人々の悲鳴が聞こえてくる。

エントランスから直接跳び上がろうとするが、

「ああつ、なにをするのですか? 放してください!」

助けた人々が逃げずに、セリエルの身体へしがみついていた。

「大丈夫です、外に出ればもう安全ですから、手を放して……はうっ、だ、駄目です、変なところに触つては……、ひやわっ、あ、あの、や、やめてください、んうっ、だ、だめです、放して……!!」

怯えて頼ってきたのだと思い、無下に振り解けずにいると、乳房や尻にまで指が食い込んできて、熱帯びた刺激に戸惑う。

「こうしている間にも、上の階の人たちがっ。やむを得ません、ごめんなさいっ!」

怪我させない程度に払い退けようと決心する。



「我らの拡散を妨げる天使よ、お前も同化しマテリアルとして活用してやろう」

「有機生命体への攻撃は出来まい。抵抗は無意味だ、我らに従属せよ」

突如、まとわりつく人々から、抑揚の無い無機質な声が発せられた。

「デモンシードが人間の身体に侵蝕した？」

電脳に特化した段階で、デモンシードは本来の悪魔が持つ、生物への憑依能力を失ったはずだ。

「同化の過程で打ち込んだインプラントにより、有機生命体の中枢神経を電氣的に支配した。これより中断された同化を再開し、混成体プロテウスVの構築に入る」

「プロテウスV？」

「生物と機械を融合させ、天使対策に特化した我らデモンシードの新たな肉体だ」

返答と同時に天井が崩れ落ち、上のフロアから巨大な塊が落下してきた。

何台ものゲーム筐体が、人間を取り込みながら無秩序に合体を重ねた異形の機械。

「くっ！ セイクリッド……。ああああっ」

セリエルが再び雷撃を放とうとするが、それよりも早く巨大機械から強烈な瘴気が放たれた。

「身体から、力が……。抜けていく……」

激しい衝撃を喰らって、天使としての力を集中出来なくなる。それでも手足の力を振り絞って逃れようと藻掻くが、

「有機生命体ユニットを基体Bに同化」

セリエルに絡み付いたままで、デモンシードに侵蝕された人々が巨大機械に取り込まれてゆく。

「人間たちが、機械につ。彼らを解放しなさいっ」

自身が危機だというのに、それよりも人々の身を案じる。しかしみるみるうちに人々の身体が機械に覆われ、パーツの一つへと変貌を遂げて行く。

「天使対策ユニット、プロテウスV構築完了」

また巨大機械の方も次第に、歪なロボットのよう

な人型に近い姿へと変形し、威圧的な音声で名乗る。セリエルの手足を押さえ付け、身体にしがみついていた男たちの腕が、頑丈そうな鋼鉄のアームと化して拘束を続ける。

「これより天使攻略プラン・アルファを実行する」

無防備にされた状況でどのような攻撃を下されるのかと身構える。だが、

「はあううっ！ な、何をっ。妙なところを触るのは、やめなさいっ。ひあっ。また……。く、くすぐりたいから……。は、放しなさい、んうっ!!」

無数のマニピュレーターが一斉に、セリエルの身体をまさぐり始めた。

金属の冷たさと、無遠慮に素肌を弄られる不快感に身を振りながら呻くが、鋼鉄の枷はピクともせず、

細い金属の腕は規則的に刺激を与え続ける。

「こんなこと……。こそが、あうっ、無意味ですっ。いいい加減に、しなさい、い、はあううっ」

この無防備な状態でどめを刺されないのは幸いなのだが、生殺しのように不可解な仕打ちをされて戸惑いと不快感が積み重なって行く。しかも、

「ふあっ、んっ、くうっ、はあううう。変なところばかり、ひやうっ！ さ、触って……。あああっ。機械のくせに、ああうっ、邪なことを……。んあっ」

初めは無作為だった触り方が、次第に悩ましい反応をした箇所へと集中して、強弱織り交ぜた刺激を繰り返してきた。

「天使の性感帯及び、効果的な刺激パターンの走査を続行。臀部、腹部、背部、腕部、脚部、クリア」

「調べ……。られてる？ 私の身体……。感じるどころを探られちゃってる、くふあ、あ、あああっ、だめ、触り方が、あううっ、だんだんと……」

心地よいポイントを刺激されて反応してしまうと、

すぐにそこを中心とした愛撫を集中させてくる。

さらに刺激の種類や強弱も、一番感じるパターンを割り出されてしまう。

「電脳悪魔が、なんで、はう、こんな、こと……。をっ。あふっ、あ、あああっ」

人間を性欲で惑わしたり陵辱を与える悪魔は珍しくないが、電脳に特化したデモンシードはそのような欲望とは無縁のはずだ。

事実、無数の機械腕から繰り返される愛撫も、作業として効率的に快感を与える動きをしているだけで、興奮などの感情的要素は一切感じられない。

「機械……。なんかに……。ふあ、ああ、あふう」

ただ機械的な行為として与えられているだけの刺激なのにと意識するほど、はしたない反応を示してしまう自分の身体が恥ずかしくなる。

「だ……。め、んう、く……。あふう……」

平然と装おうとするけれど、尻房をゆつたりと捏ね回されるとじんわりほぐされる快感が生まれて、脱力の溜息が零れる。

一瞬の虚脱に陥った隙を突いて、

「あひっ！ おあっ、あ、あああっ」

背筋を指先で擦る刺激と、臍の周りを舌で舐め回される感触が与えられた。その中でも身体中の心地よいポイントへランダムな愛撫がもたらされ、その度にピクンピクンと身体が震える。

（私の感じるどころ、全部……。探られちゃってるっ。私を感じる触り方、全部知られちゃってるう）

最初に身体をまさぐられたとき、無防備に反応したのがいけなかった。

（機械化した悪魔が、こんな攻撃をしってくるなんてっ。早く逃れないと……）

愛撫が続いている限り攻撃を加えられることはなさそうだが、このまま喘いで悶え続けるなんてこれ以上耐えられない。それにこのプロテウスVと称し



た機械から悪魔の汚染を取り除かないと、取り込まれた人間達が手淫になる。

（意識を……んふあ、集中、あう、はああ、しなくちゃ……。力……を、はう、ん……、くう……）

瘴気の波動を喰らって弱まったとはいえ、残った力を振り絞れば手足の枷くらいは壊せるはずだ。

快感に理性を惑わされながらも、聖句を唱えようとするが、

『天使セリエルの聖体組織解析完了。排卵誘発ウィルス作成……完了。投与開始』

プロテウスVが無機的な声と共に、無数の細かい針をセリエルの下腹に押し当ててきた。

「ひうっ！ 何をっ？！ や、やめて……はうっ！」

チクリと刺さる感触があったが、痛くはなくむしろ心地よいようなくすぐったさを覚える。

それと同時に、

「な……に、これえ。身体が……、熱いっ。ふあ、あ、ああっ！ 変な感じに、なっちゃうっ」

下腹の奥が熱を帯びて、心臓のように激しく脈打ち始めた。その鼓動に乗せて熱が全身に広がり、気怠い心地よさで満たす。

「くふう、ああ、はああ。うそ、身体……弄れるの、くふああ、前よりも、あふう、感じ……ちやう。んああああ、敏感に、なっちゃってるう」

機械の愛撫は変わっていないのに、身体が熱くなるに連れ快感が激しくなってきた。

『排卵誘発プログラムによる発情を確認』

甘ったるい匂いの汗を滲ませながら、増大した気持ちよさに背筋をゾクゾクと震わせる様を、悪魔の機械が細密に観測していた。

「発情……？ 私、天使なのに。いま、肉体があるから、そんな状態にされちゃう。はうっ、ああっ」

本来は霊体である天使だが、現世に現れる時は人間の構造を参考に肉体を構築させている。

そのおかげで実体として存在し、人々を直接護ることが出来るのだが、いまはその生の身体の人間とほぼ同じ構造と感覚に惑わされてしまう。

「おお、あああ、これ、人間の……性的な、快感……ッ。頭が、はあううう、蕩けるう……」

戦いで受ける痛みにはいくらでも耐えられるけれど、これまで味わったことのない、理性を揺るがす快感に抗うことが出来ない。

『性的感度上昇に応じて、愛撫レベルを上方修正』

まさぐられればまさぐられるほど悶えて蕩ける身体に、機械の腕が新たな行為をもたらし。

「ひあつ、何をっ。ふあつ、ああつ、聖衣がっ、だだめええっ」

フリルで飾られたレオタードの胸元が、果実の皮を剥くようにめくられた。はち切れんばかりの美房が、奔放に揺れ弾む。

「ああつ、胸が……、イ、イヤあ、こんなの……」

その撓む膨らみを、機械の腕が捏ね始めた。

「はあううう。身体ますます熱く……なっちゃうう。やめ……っ、ひあ、んううう、はあああつ」

生身の感覚に疎いため、初めて味わう乳房への快感を受け止めきれない。そんな天使の無垢な肉体を悪魔の陵辱機械が的確な刺激で追い詰めてゆく。

「揉みながら、ああううう、揺さぶられるううう。んああ、そんなに、捏ねられたら、あ、あああ、変な形に、なるから、ああ、はああああつ」

一方からだけでなく、多数のアームが大きな膨らみを各方向から捏ね回す。しかもマッサージ器のように振動を加える端末が弾力的な乳房を、まさに震えるような快感を与えながら波打たせる。

（人間が、赤子に授乳させる器官なのに、なんでこんなに、あううう、感じやすいのっ？！ 他のもところとは、あふう、全然……違うう。揉まれると、あ、あああ、気持ちよくて、頭、変になっちゃううう）

乳房への刺激も、感じるやり方と箇所を分析されて、追い詰められてゆく。

（ますます、力が……抜けていっちゃうう。頭の……中、あひつ、気持ちいいので、いっぱい……されて、ふああつ、集中出来ないッ。デモンシードが、こんな、攻撃……してくるなんて、ひううう）

物理的な破壊活動を仕掛けてくる電子の悪魔に対応するため肉体を得たのに、その生身の身体を混乱させられ為す術もない。

「ひあつ！ あふうう、乳首いッ。乳首をそんなにいい、おお、あ、ああつ、だめっ、ああああ、強すぎるう。気持ち……いいの、ふあうう、キツすぎるからああつ！！ はあんっ、あああつ、あうっ！」

十分に感度が高まったところで、クリップ状のアームが、乳房の充血した乳首を容赦なく摘んできた。

「ひぎいいい、頭あ、飛んじやうう。ふああああ、そんなキツく、んあああ、挟んだらあ、痛いのに、疼いちやうう。ムズムズしちやうからっ。ふううううううあああううう！！」

未知の性的な快感だけでも全く対処出来ないのに、狂おしい疼痛の炸裂にガクガクと全身が激しい痙攣に見舞われる。しかもさらに左側の乳房に、透明のカップが押し当てられた。

「ひっ、な、なに……？ ふおおつ、ああつ！！」

密閉されたカップの内側から、一気に空気が吸い出される。

「はあ、が、ああああ、吸われ……るうう、おっぱい、ああああ、吸い上げ……られてるうう！！」

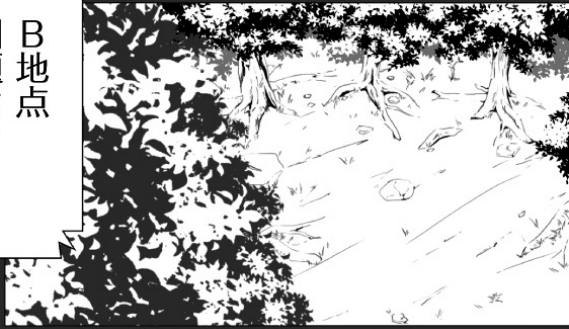
真空状態の搾乳を施され、母乳など出るはずもない乳首が狂おしい疼痛に襲われた。

「また、身体、熱く……なっちゃううう。んううう、お腹の、奥ッ、ふあああ、ドクドク脈打って、ふああ、あああ、なに、これ……熱いの、中から……溢れ……んふあああつ！！」

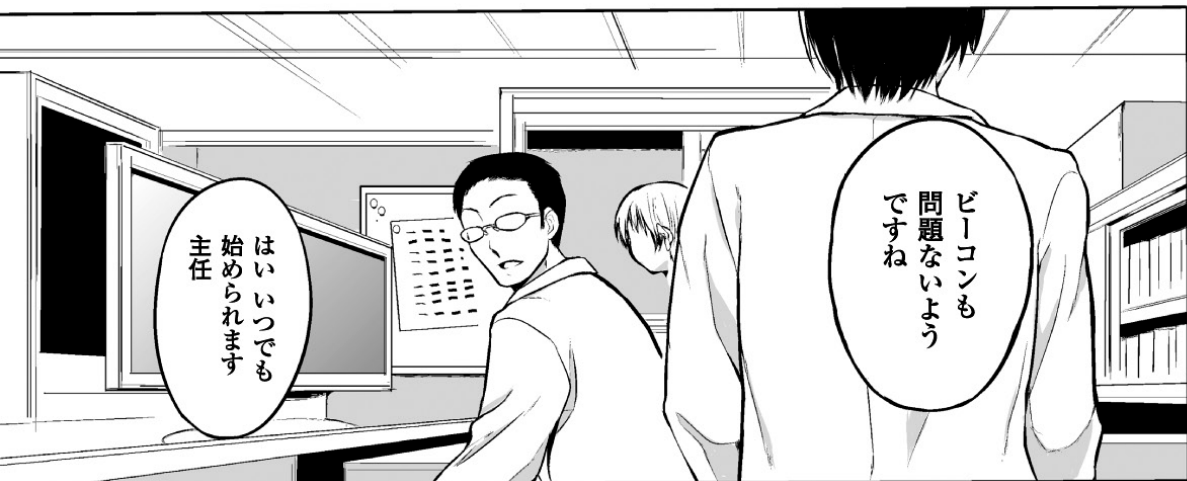


虫と少女が戯れる人気シリーズの続編が登場!  
電子連載開始前に第一話を先行掲載!

B地点  
問題なし  
どうぞ

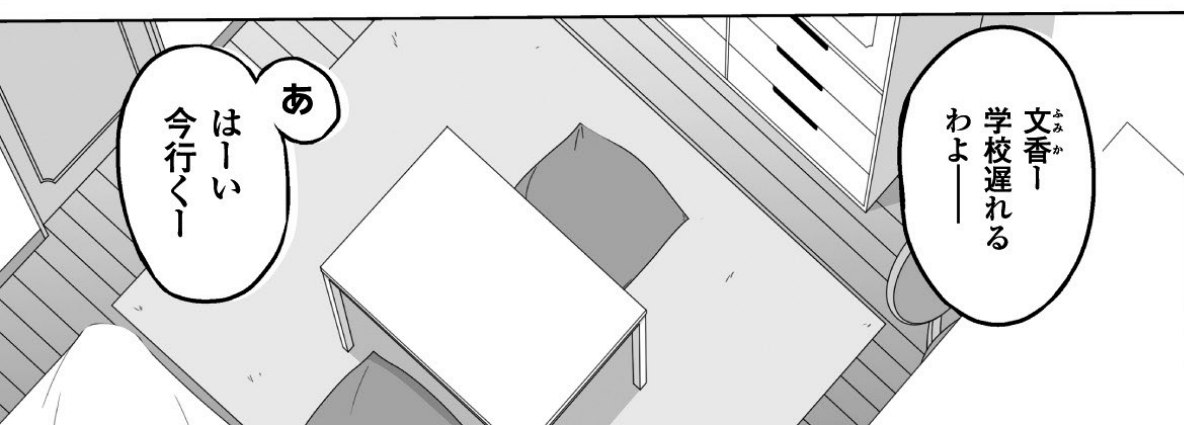


こちらA地点  
カメラ——  
感度良好











私の名前は  
白井文香

県立校に通う  
高校2年生だ

キーン

コン



趣味は読書  
文芸部所属

リア充

目立つ所もない  
いわゆる陰キャと  
いう奴だ

なーにやってん  
だらな私





ホント…

な…なに  
やってんだろっね  
わたし…



ハイそこ  
ブックサ言わない  
手動かして—

ぶっ部長…

なぜ我々  
文芸部が裏山で  
ゴミ拾いなど…



ウチは大して  
実績はないん  
だから

こうやって  
点数稼ぎしないと  
部費が下りないのよ



ぐぐぐの音も  
出ない正論

判ったら  
一つでも多く  
ゴミ拾うこと

解散！



ぶ…部費…  
……

フヒイイ  
これ時給にして  
いくらかしら…?



ハアア…  
今ごろクラスの  
連中は楽しく  
遊んでいるん  
だろーなあ

それに引き替え  
私はこんな処で  
ゴミ拾いかよお



グッ



もーヤダ!

つまんない  
つまんない  
つまんない!



ももう無理  
きゅ休憩…

の喉渴いた  
ジュース飲みたい…



装刃戦姫  
**サクラヒメ**  
フタナリ淫獄に堕ちる黒髪乙女へ

第二回 忍び寄る魔手、侵される日常

小説 ゆう き き かく  
NOVEL **有機企画**

挿絵 みどりぎむら  
ILLUSTRATION **緑木邑**

サクラヒメこと建宮流華……  
学園のトイレでフタナリオナニー!?



がある」

二体は息をのむ。羅轟丸とは太古に封印されたすべてのオニグミを束ねる存在だ。神にも等しい羅轟丸を復活させるために何代もの八大鬼が苦心したが、いまだ成功していない。

復活の立役者となれば直属の副官として、絶対的な地位を約束されるだろう。

「なるほど。それであのような手段を」

「そのためには徹底的に心をへし折って、ボクたちに忠誠を誓わせないとね。墮ちた最強の装刃戦姫。復活のトリガーとしたのは申し分ないはずだよ」

「すげえ。これなら出世街道まっしぐらだ！」

「だから霧幻鬼と土愚鬼には見張りに回ってもらおうかな。サクラヒメやその仲間が爆震蟲を祓わないとも限らないからね」

「承知いたしました」

「オウケイだぜ！」

威勢のよい返事に鬼蛙はうなずく。

「ボクは街に出るよ。布石も打っておきたいしね」

「布石ですか？」

「彼女を縛る大切な……ね」

二体に向ける鬼蛙は、醜悪な顔面には喜びの笑みが刻まれ、ドス黒く濁った瞳には野望の炎が燃え盛る。

「はあ……」

神社での陵辱から三日後。岩戸学園。装刃戦姫サクラヒメこと建宮流華は力なく嘆息する。

あのと自宅へ戻り身体は清めたが、股間に生えたフタナリ肉竿はいかなる手段をもつてしても除去することができなかった。もどかしい射精への欲求も依然そのままだ。

良平の件で対魔協会に連絡することもできず、三日間は休学。一人で悶々とする日々を送っていた。

（なにか……なにか手を打たなければ。このままで

は奴の言いなりだ。だが、一体どうすれば……）

「ため息なんてめずらしいね。大丈夫？ まだ風邪が治ってないの？」

「ひやう!? りよ、良平!」

恋人の問いかけに素つ頓狂な声を上げてしまう黒髪乙女。上の空の代償だ。

「? そんなに驚いたの？」

「い、いや別になんでもない。少し考えごとをしてただけだ」

アワアワと手を振り、気にするなとアピールする。悪鬼の策謀を本人に知られるわけにはいかない。少年まで危険に巻き込んでしまう。

（わたしが鬼蛙に辱めを受けたと知ったら、どんな顔をするのかな。おまけに……男のモノまで生えているとわかったら……ダメだ! 言えるわけがない!）

恥辱を味わわれた記憶がよみがえる。ファーストキスを肉棒に捧げる屈辱。汚辱。恥辱。死んでも恋人には知られたくない。

「悩みがあるなら相談してね。ぼくなんかじゃ頼りにならないかもしれないけど」

「自分を卑下する必要はない。ありがとう良平」

やわらかな笑みがこぼれる。頼りないところもあるが、氣遣う気持ちに嘘はない。その好意を嬉しく思いながら、建宮流華は決意を新たにす。

（必ず鬼蛙を討滅し良平を助ける。これしきの逆境に屈してなるものか!）

胸の谷間に煌めく神器結晶に誓う。両親の仇を取るためにもあきらめるわけにはいかない。

と、そこへ足音を消しながら男子学生が近づくと、

「むっ、誰だ？」

人並み外れた察知能力で後ろを振り向く。瞬間、黒髪乙女の表情は蠟人形のように蒼白となった。

一筋の光も差しこまない洞窟の最深部。カビの臭気が鼻腔を刺激し、ジメジメした岩肌には苔がはびこる。現代人ならばまず立ち入ることのない領域だ。オニグミ幹部、八大鬼の一体、鬼蛙は仮宿に腰を下ろし、次なる調教に頭を巡らしていた。良平の命を握っている限りサクラヒメからの反撃はない。じっくりと計画を立て辱める算段である。

すぐそばには部下の土愚鬼と霧幻鬼が膝をつき、命令を待っていた。二体の表情には苦いモノが混じり、なにやら不満げである。

しばらくの沈黙の後、痺れを切らすように霧幻鬼が口を開いた。

「鬼蛙様、なぜサクラヒメを始末しないのですか!! ああ夜が千載一遇の好機! 敗れていった仲間のためにも、決着をつけるべきでは!」

「オレも霧幻鬼と同意見だぜ兄貴。人間どもはウツつきで凶暴だ。寝首をかかれねえうちにさっさと殺っちまったほうがいい」

「落ち着いてよ二人とも。ボクにいい考えがあるんだ」

「どのような？」

「マジかよ。兄貴はいろいろ考えてんな!」

疑いの眼差しを向ける霧幻鬼と子供のように目を輝かせる土愚鬼。二体はオニグミの最下層、腐肉あさりの時代から鬼蛙に付き従っていた戦友だ。それは幹部になった今でも変わらない。

「八大鬼の一角を討滅するほどの強烈なパワー。彼女と神器結晶の力を手中に収めることができたとしてたら？」

「たしかに。実現できれば我々にとって貴重な戦力になります」

「いい非常食になるんじゃないの？」

「オニグミの悲願である《神鬼、羅轟丸》さまの復活も可能ということだよ。彼女には鍵としての素質



## 登場人物紹介



### 建宮流華

日本対魔協会に所属する戦姫。「装刃戦姫サクラビレ」に転身し、人に仇なすオニグミを滅殺する

### 鬼蛙

オニグミを束ねる幹部。蛙坂蔵夫という名で流華と同じ学園に通い、彼女を徹底調教する。

### 三城良平

流華の幼馴染みにして恋人。戦闘能力はないが、彼女を精神的に支える心やさしい少年。

### 前号までのあらすじ

人に仇なすオニグミと戦う装刃戦姫サクラビレこと流華。対魔協会最強と謳われていたが、鬼蛙の罠にかかり敗北してしまう。股間にベニスを生やされ、地獄のようなフタナリ調教を強いられるのであった……。

「キサマ! なぜここに!?!」  
「あれ? 二人って知り合いなの?」  
男子学生はわざとらしく頭を下げ、自己紹介をする。べつとりとしたマッシュルームヘアを見せつけながら。  
「はじめまして建宮流華生徒会長。転校生の蛙坂蔵夫です。よろしく」  
蛙坂の顔、三段腹の下に隠された呪力はまぎれもなく鬼蛙のものであった。日中は基本的に動けないオニグミだが、八大鬼クラスだけは違う。  
ガムを噛む程度の気軽さでクラスメイトを喰らい殺すことも容易い。流華の頬に汗が流れる。  
だが、不安とは裏腹に鬼蛙もと蛙坂は、なんのアクションも起こしてはこない。  
それどころか流華を無視して良平に話しかける。  
「良平くん。今度ボクにも剣道を教えてくれないかな? ずっと勉強漬けだったから、ここでは運動もがんばりたいんだ」  
「ほんとに! うちはいつでも新入部員募集中だから嬉しいよ。ね、流華」  
「あ……ああ、そうだな」  
「ありがとう。今日の放課後にでも顔を出すよ。そ

れからね——」

そして軽く談笑すると自分の席へ戻ってしまった。あまりにも無防備で、本当に学園生気分を味わいにくかったのかと思ってしまう。そうだが、  
(いや、そんなことあるわけがない。奴め一体なにを企んでいる)

流華は良平に訊ねる。

「あの生徒はいつここにきたんだ?」

「流華は知らなかったよね。昨日ご両親の事情で転校してきたんだ」  
「……それから学園で何か変わったことはあるか?」

「んー、特にないよ。蛙坂くんいい人だし」

背筋をナメクジが這うような感覚。言いようのない寒気を感じる。  
「もう少し詳しく話を聞きたい。例えば」

キーンコーン。カーンコーン。

情報を集めようとした流華だが、ちょうど会話を区切るようにチャイムが鳴る。これ以上の話はむずかしそうだ。

「もう戻らないと。流華も無理しないでね」

「ああ。心配するな」

ドアが開き教師が着席をうながす。授業がはじまった。だが、内容はまったく頭に入っていない。頭に浮かぶのは蛙坂のことばかりだ。  
(わたしに逃げられないとプレッシャーをかけにきたのか? いや他にも思惑が——、ッ!? な、なあ!?! ああああああああつ!?)

突然の昂りに眼をむく黒髪少女。原因は股間に生えたフタナリベニスだ。醜い肉棒がかま首をもたげ、勃起状態に移行しようとしているのだ。海綿体が膨張し黒のレース下着がモッコリと膨らんでいく。  
(一体どうなっているんだ!?! 欲情するようなことなんて……なんにも……!?)

困惑するフタナリ美少女。身体が熱っぽく火照り、

射精衝動がこみ上げる。右手を押さえていなければ、今すぐにでも手淫してしまいたいそうだが、  
(どうする!? どうすれば!? このままではみんなに、良平にバレてしまう! 授業中に勃起するフタナリ変態女だつて知られてしまう!)

迷っているうちに包茎チンポはどんどん大きくなり、スカートの上からでもわかる大きさになってしまった。完全に勃起した内筒は竹刀のようにスカートを持ち上げる。

(い、いやだ……見られたくない……!?)  
こんもりと股間を膨らませる清楚な生徒会長。問題でも当てられれば、クラス中に痴態を晒すことになってしまう。  
流華はパニックになりながらも席を立つと、前かがみになりながら教師へ宣言した。  
「すみません、気分が悪いので保健室にいつてもよろしいでしょうか!」

「建宮か? ど、どうした?」  
「では失礼します!」  
答えを待ちほしくない。疾風のごとくドアに駆け寄って、勢いよく開け放つ。そのまま廊下を早歩きで進んで、あつという間に教室から遠ざかる黒髪少女。  
「流華?」  
良平や他のクラスメイトはポカンと口を開けて、その様子を見つめていた。

◆◆◆  
「あ、あ……くっ……お、治まれ……静まれ……んくうううう!」  
壁に手つき、肩で息をする。むず痒さにも似た尿道のヒクつきは一向に改善されず、むしろ大きくなるばかりだ。  
「すいぶんと苦しうだね」  
「ッ! やはり貴様の仕業か!」  
ギリギリと双眸を吊り上げ仇敵をにらむ。当の本人

はどこ吹く風だ。

「具合が悪そうだから付き添おうかと思つてね。それと今は蛙坂だよ」

「ふんっ、どちらでも同じことだ」

「フタナリチンポの具合はどうかかなサクラヒメ。もう今すぐにでもオナニーしたいんじゃない？」

「悪趣味な貴様らしいやり口だな」

「ちよつとした余興だよ。キミの日常を観察してみたかったんだ。どこであろうとボクに逆らえないことは理解できたかな？」

「わかつている。わざわざ言われるまでもない」

「それはよかった。じゃあ移動しようか。もう限界でしょ？」

「……ああ」

鋭利な殺意を胸に秘め従う生徒会長。学園でのフタナリ淫辱が幕を開ける。

「ここなら邪魔も入らないでしょ」

二人が到着したのは男子トイレ。校舎の片隅にある取り壊し予定の古いトイレだった。長い間手入れがされておらず、異臭が漂っている。

「人もいないしうってつけだね。流華」

「なれなれしく話かけるな」

目も合わせず返答する。名前を呼ばれるだけでもおぞましい。

そして、蛙坂は喜色をにじませながら口を開いた。清楚可憐な黒髪乙女を貶めるために。

「今からキミには便器を舐めながらチンポをしゃべってもらうよ」

「……今なんと言つた？ 悪いがよく聞き取れなかったぞ」

「便器を舐めながらフタナリオナニーをしろつてことさ。もちろんこれは要求じゃなくて命令だからね」

「べつ、便器だどっ！？ ふざけるな！ そんな汚らしいことができるか！」

「別にいいけど、断るなら良平くんだけじゃなくて、クラスメイトの安全も保障できないな。明日のニュースが楽しみだね」

「この卑怯者！ つ、わかつた……言うとおりにすればいいだろう」

その他にも屈辱的な注文が言いわたされ、流華はスカートのホックを外すと下着姿になった。黒のパンティには恥ずかしいシミがにじみ、立派なテントを張っていた。続いてパンティをずらし股間を露出する。短めに揃えられた陰毛は黒い草原のようで、じつとりと湿り気を帯び、雌の匂いを放っていた。

勃起した包茎チンポは淫猥にぬめり、恥垢の香りがした。ピンポン玉サイズの金玉がプリプリと揺れ、卑猥さと可愛らしさをアピールする。

「へー、きれいに手入れされているんだね。戦闘バカの装刃戦姫だからもつとモサモサのボーボーかと思つていたよ」

「だ、黙れ！ この変態め！ それより便器を舐めながらオナニーする。命令はこれだけでいいんだな？」

「基本的にはね。でも、もう少し面白くしようかな」

蛙坂はビニール袋に入つた液体を取り出すと小便器にかけた。黄色い液体が便器を上から下へと流れ落ちていく。きついアンモニア臭が広がった。

「うっ、に……尿か。ひどい匂いだ」

「そう尿、オシッコさ。キミの大好きな良平くんのね」

「良平の!?」

「愛しい人の排泄物のほうが気分も乗るでしょ？ ボクの氣遣いだよ」

「余計なことを……」

「あと、ボクがいいって言うまで射精しちゃダメだからね。じゃ、スタートだよ」

「ふん、せいぜい調子に乗つていろ」

中腰になり小便器に相対する黒髪乙女。良平の小便と積り積もった尿石の刺激臭が鼻腔を苛む。ツンとしたアンモニア臭が目にも染みる。今までの学園生活では考えられない状況だ。

（なんてことを思いつくんだあの外道は！ だが……やらなければみんなが……）

泣きたくなるくらい惨めなシチュエーションに唇を噛む。小便器を舐めるなんて想像したこともない。間違つてもうら若き乙女がする行為ではない。

（良平……わたしに力を貸してくれ）

それでも意を決し、便器に顔を近づける。学園一優秀な建宮生徒会長は小さなお口を開き――

べろっ♥ べろっ♥ べろべろっ♥  
黄ばみを舐めとりはじめた。

（く、くさい……！ きたない……！ う、うぐうう……ぐううううう！）

チロチロと舌を動かし汚汁を舐めとる。愛する少年のオシッコを味覚全体で味わう。鼻が潰れるほど便器に押し付け、発狂しそうな臭気を吸い込む。

「ちゅっ、んくっ、あうむうう……」

「クフフ、いい姿だね。便器のお味は気にいつてもらえたかな？」

「う、うるひゃい……べろ、んちゅる、じゅりゅ……ちゅあ……」

トイレブラシの真似事をしながら汚れをこそげ落とす。艶やかな黒髪に唾棄すべき臭気を染み込ませながら。

「べろ、べろべろ……うええんぐうう……ちゅあ、はあ……えぐううう……」

「右手がお留守だよ。ほら、チンポもシコシコしないと」

（そうだ、おチンポ……しごかないと）

そつと指を当てフタナリ陰茎に触れる。汚辱行為で恥ずかし気もなく勃起した肉竿は、火かき棒のよ



うに熱せられていた。

(熱い……こんなに興奮しているのか……)

身体の一部だと思えない滾りに困惑する。わずかな逡巡のあと、白魚のような指から粘着音が奏でられた。

しゅこっ ♥ しゅこ ♥ こしゅこしゅ ♥

「んっ、うう、ふううう……んぶう」

皮をむかれた亀頭は桜色で、チェリーに似た瑞々しさだ。初々しい肉傘は変態的な状況に順応し、萎えるどころかさらにカリ首を尖らせていた。

「べちよ、んくっ、ちゅむふああああああ……」

「黙っていてもつまらないし、実況でもしてよ。キミが今やっている変態プレイをね」

「ちゅぶ、はう……ちゅうう、あ、ああ……」

徹底的に心をへし折ろうとする蛙坂。流華は自らの言葉で被虐の泥潭に沈む。

「ちゅっぶっ、むくう。わたしは……建宮流華はただいま便器舐めオナニーの真つ最中だ……んっはああああん！」

「良平くんの小便是美味しいかい？」

「くちゅっ、べろ……とつても美味しいぞ。苦くてえしよっぱくて……く、クセになってしまいうさだ」

「溜まった汚れや黄ばみはどうかな？」

「こちらもいいぞ。はあむ、顔も知らない男子のオシッコ黄ばみ……かぐわしい。くんっ、スンスン。スンスン」

ヒクヒクと鼻を動かし悪臭を嗅ぐ。屈辱に耐え、蛙坂に都合のよい言葉を吐く。

「チンポからもいやらしい音がするよ。よほどオナニーが気に入ったみたいだね」

「んくっ、そうだオナニー気持ちいい……おチンチンこするのイイ……んむ、ちゅはあああ」

「その調子だと家でもしているよね。何回かな？」

「え……んむうう、そ、それは……」

あの夜、肉棒を植え付けられた流華は常に射精の欲求に苛まれ続けた。

しかし、いまだ一度も自分の意志で自慰をしたことはない。装刃戦姫としての誇りが常人では耐えがたい疼きに抗うことに成功していた

「答えてね。何回？」

「に、二回だ……朝と夜に二回している」

「本当に？ 嘘ついてない？」

「本当だ！ トイレやお風呂場でシコシコしているむぶっ、ふはあ……包茎おチンポが恥垢まみれだから……むいてお手入れしないとイケないんだ……」

「やつぱりオカズは良平くんなの？ 彼氏のことでシコってるのかな？」

「そうだ、りよ、良平だ。良平の裸を想像して……お、おチンポしごいてる！ 顔にぶっかけたらどうなるかと、チンチン同士でキスとか、いやらしい妄想ばかりしているんだ！」

「そうなんだ。彼が知ったらどう思うだろうね」

「やめろ！ 言うな！ バレたら軽蔑されてしまう……おチンポコキ大好きの変態だと思われてしまう……べちゅ、ちゅく、りゅんっ……」

便器を舐めながら健気に嘘をつくフタナリ乙女。手淫も続けながら悪鬼の機嫌をとる。

(できる限り従順なフリをするんだ。必ずどこかに隙があるはず……！)

面従腹背で機会をうかがう。どれだけ屈辱的な言葉を言わされようと、恋人のためなら耐えられた。

(ぐっ、……この疼き、射精していなかった反動がきているのか……まったく面倒な身体にしてくれたものだ……うっ、んくうううっ！)

しかし、どれだけ清廉潔白でいようと肉竿の充血は止められない。三日ぶりの手淫に興奮したフタナリ勃起はもはや抑えが効かない状況。

倒錯的な行為が快感を増幅させ、ミミズのような

血管が浮かび上がるとともに、カリ首の高さが増す。

金玉も子種汁を大量生産し、今か今かと射精タイミングに備えていた。

蛙坂の許可さえあれば、あつという間にだらしく射精してしまうだろう。

「くうむ、ちゅぶ、はあ、はあ……満足したか？ もう……んくう、いいだろう」

「んー、どうしようかな」

「貴様、まだ焦らすつもりか」

その時、乾いた靴音が廊下に響いた。教員の履くサンダル音だ。

「まさか……！」

「手の空いた先生が向かっているみたいだね。サボっている生徒がいるんだから当然だけど」

「他人事みたいに言うな！」

氷水を浴びせられたような怖気が流華を襲う。男子トイレで小便秘を舐めながらフタナリオナニーする生徒会長。人生終了としか表現できない状況だ。

「まったく、また不良どもだな」

年配の男性教員の声が聞こえてくる。もうすぐそこまで迫っていることがわかる。

これまでの出来事が走馬灯のように巡る。緊張で心臓が破裂しそうだ。

(時間がないっ！ こうなったら……！)

ドアが開く寸前、建宮流華は決断した。

「ん？ 誰もいないのか？」

男性教員は眉を顰める。男子トイレの中に人影はない。黒髪乙女と蛙坂の姿は、

「んっ、せまい……」

「自分から誘っておいてワガママだなあ」

封鎖結界の中にあつた。

緊急避難的に神器結晶を起動し逃げ込んだのだ。ただし、急いで展開したため二人が隠れる程度の広さしかなく、蛙坂の肥満体型のおかげでスペースは

大人気変身ヒロインAVGが  
書き下ろしストーリーで登場！  
三人目の光翼戦姫に危機が迫る！！

光翼戦姫EXS-TIA  
**エクステリア**

小説 NOVEL うえだ 上田ながの  
挿絵 ILLUSTRATION みやごえよしづき 宮越良月  
原作 Lusterise



「行くよ。アザリン」

裸の創真——紫峰創真が優しく語り掛けてくる。剥き出しの肉棒を痛々しい程に勃起させながら……。大きく膨れ上がった亀頭に、肉茎に浮かび上がる幾本もの血管。ドクドクッと鼓動する屹立を見つめながら、創真と同じくやはり生まれたままの姿でアザリンは「え……ええ」と緊張と興奮がない交ぜになった面持ちで頷いた。

創真の部屋にて、丸みを帯びた乳房、ピンク色の乳首、キュッと窄まった括れ、薄い陰毛に隠された秘部を剥き出しにする。そんな肢体を熱感こもった視線で見つめながら、創真は肉棒の先端部をアザリンの秘部へと押し当てて来た。花弁はしつとりと濡れており、触れられただけでグチュッと淫猥な音色が響く。

「んふんっ」

亀頭の熱気が肉花弁に伝わってくる。壁が火傷してしまうのではないかというほどに熱い。だが、その熱気は決して不快なものではなかった。それどころか、肉棒の温かさを感じていると、それだけで意識が飛びそうになるほどの心地よさを感じてしまう。これが欲しい。これを膣奥に突き込んで欲しい。

——そんな女の本能が膨れ上がって来るのを感じた。自然と自分からも腰を突き出す様な体勢を取ってしまう。無意識のうちに大きく足を開いた。全身で挿入をねだる様に……。だが——  
「分かっているわね。これはその……回

復。そう、P Pを回復するためだけに

にするんだからね。それ以上でもそれ以下でもないんだから！ 別にソーマのことが好きだからとか、そういうわけじゃないんだからね!!」

素直な気持ちに口になけない。欲しい。早く挿入されて——なんて言えるはずがない。気がつけばちよつと強気な言葉を口にしてしまっていた。

ただ、その言葉は決して創真にだけ向けたものではない。自分自身にも言い聞かせるものだった。

（そうよ。これはあくまでも回復のため。それだけよ。今は私がエクスティアとして戦うしかないんだから……）

現在、本来異世界からの侵略者であるロギアと戦うエクスティアこと葛城真理奈と、エクスティア・シュヴァリエことリースヴェルヌはこの街には居ない。ロギアの侵略も一段落したというところで、二人は揃って海外旅行中だからだ。が、その間隙を縫って再びロギアが出現した。結果、色々あってアザリンがエクスティアとして戦うことになったのである。

エクスティアの力の根源は人の感情が揺さぶられた際に発揮されるP Pである。感情を揺さぶるために最も大きな行為は性交だ。だから、アザリンは創真に抱かれなければならない。そう、これは必要だからするだけのこと。決して創真のことが好きだからとか、そういうわけではないのだ。  
「分かっているよ」

創真は頷いてくれる。

「分かっているならいいわよ」

そう、分かっているのならばそれでもいい。しかし、どうしてだろう？ 少しクツと胸が痛んだ。

「そ、それじゃ早く来なさい」  
痛みを誤魔化す様に創真を促す。

すると創真は頷くと同時に腰を突き出してきた。肉槍を蜜壺に挿し込んでくる。正常位で二人は繋がる。

「んっふ！ あっあっ……来た。くん！ 挿入って……あっふ……んふあああ」

ズブズブと侵入してきた屹立によって膣道が押し開かれる。内側から内臓が圧迫される様な感覚を覚えた。塞がれているのは膣だ。だというのに、息苦しささえ感じる。しかし、どうしてだろう？ 決して嫌な感覚ではない。

息苦しさは心地いい。繋がりがあっているのは下腹部だけだというのに、まるで心まで一つに混ざり合い、溶け合っていく様な感じがした。

「あっあっ……いい、いいっ」

自然と性感を告げる様な言葉を口にしてみよう。

「俺も……すげえ気持ちいいよ」

創真も心地よさそうに吐息を漏らした。気持ちいい——それが言葉だけではないことを証明するように、膣中で肉棒が膨れ上がる。

「う……動いて……ソーマ」

もっと感じたい。肉棒の心地よさを刻み込んで欲しい——更なる快感を本

能が求める。劣情に逆らうことなどできない。ほとんど無意識のうちに更なる行為を求めてしまう。すると、それに答える様に、創真もピストン運動を開始してくれた。ドジュッドジュッドジュツと肉槍で膣奥を幾度も叩いてくれる。

「届いてる。これ……あっあっ……奥まで来てる！ あ……んっふ……はふう！ あ……たつてるうう！ あっあっあっ！」

嬌声を抑えることができない。ギツギツギツというベッドの軋みに合わせる様に、愉悅の悲鳴を響かせた。

全身から汗が溢れ出す。白い肌が桃色に染まり、結合部からはビュッビュツと愛液がピストンに合わせて飛び散った。ベッドシートが淫靡に濡れる。

「これ……駄目。我慢……で……できない！ ソーマ……もうっ!!」

絶頂感が膨れ上がって来る。自然と子宮が下り、キュウウツと亀頭に吸い付いた。

「俺もだ！ 出る！ 出るよ!!」

今にも破裂しそうな程に亀頭が膨れ上がった。

「そ……ソーマっ」

肉棒の形がはつきりと膣壁越しに分かる。それが堪らない程に心地いい。肉悦に後押しされる様に、創真の身体を強く抱き締める。創真の背に爪を立て、創真の腰を両足で強く挟み込んだ。

その瞬間、射精が始まる。ドクドクドクツと肉棒を痙攣させながら、

多量の白濁液を直接子宮内に流し込んで来た。

「あふうう！ で……出てる！ あっ  
あつあつ！ き……来てる！ 熱いの！ これ……スゴイ！ ああ……私の中……子宮……満たされて……こんな……こんなのおお！」

膣が火傷しそうな程の熱気が広がる。染み込んでくるのが分かった。創真が自分の身体の中に……。結合部を中心に身体がドロドロに湧けそうな程の愉悅が広がる。自分と創真が完全に一つに溶け合う様な快感。抗えるはずがない。

「い……イクッ！ あつあつ——私……  
……イクううう♥♥♥」

性感が弾けた。目の前が真っ白に染まる。脳髓まで溶けそうな程の愉悅に全身を激しく痙攣させ、蜜壺全体で激しくペニスを締めつけながら、アザリンは絶頂に至った。

「あつは……んはああああ♥」

歓喜の吐息を漏らす。ドクドクドクドクという肉棒の痙攣を感じながらうっとり表情を蕩かせた。

「アザリン」

そんなアザリンを創真がジッと見つめてくる。

「そ……ソーマ……」

そんな彼の言葉に応える様にアザリンはゆつくりと、自分から彼の唇に唇を寄せ、キスをしようとした。もつとしたい。もつともつと——そんな想いを抱きながら……。

しかし、その刹那、ピピピピッという通信音が室内に響き渡る。

「通信？」

慌てた様子で創真は膣からジュボツと肉棒を引き抜くと、ベッドサイドに置いてあった通信機を手を取った。

「紫峰か」

「百合ちゃん？ 何？」

通信の相手は天久保百合——PPを発見し、エクスティアに変身するためのデバイスを開発した人物である。

「敵の反応を捉えた」

短く、簡潔に、百合は用件を告げてきた。

＊

そいつはまさに怪人だった。

人間の身体に猛禽類の翼。フクロウの様な顔をした化け物。一見すると鳥の様にしか見えなくせに、白衣を身に着けているところも実に異様だ。そんな怪人が駅前にいた。

怪人は何体ものロギア戦闘員であるギムリアンを従えている。ギムリアン達は「キーキー」と不気味な奇声を上げながら、街の女性達を捕らえ、陵辱していた。

「ホントあんた達って胸くそ悪いことをするのね」

そんな彼らの前にアザリンは堂々と立つ。

「胸くそが悪い？ ホッホッホッ、姫様がそれをいいますか？」

アザリンの出現に動じることなく怪人は笑った。

「貴女も元は我々の側だ。その貴女がこの光景を見て胸くそが悪いとは——何かの冗談ですか？」

金色のまさに鳥の目でこちらを見つめてくる。

「まあ、確かにね」

怪人の言葉も一理ある。

何故ならば、アザリンだって元はロギアの侵略者だったからだ。

父であるロギア皇帝のために、この世界を襲った。罪のない人々に怪人をけしかけ、彼らを穢したりして来た。

だから胸くそが悪いなどという資格は本来ない。

だが、アザリンは変わった。創真や真理奈と出会ったことで……。いや、二人だけじゃない。こちらの世界で暮らすことで、他の人々も自分と同じ人間だと思える様になった。

だからこそ胸くそが悪い。人々が襲われている様を黙って見ていることなどではしらない。

「どうですか？ 姫様も戻ってきてませんか？ 私達と共に人間を襲い、精気を奪い、ロギアのために働きませんか？ さすれば皇帝陛下も貴女のことをお許しになるかも知れませんよ」

こちらの想いになどまるで気付かず、ペラペラと言葉を続けてくる。

「……ロギアに戻る——か。なかなか魅力的な提案ね？」

「でしょう？」

「ええ……ホント……」  
そこで一端言葉を切り——

「反吐が出るわ」  
吐き捨てる様に呟いた。

「……なるほど。まあ、そうでなければ面白くない。姫様……貴女には私の実験台になっていただきます」

こちらの答えに怪人は動じることなく嘴の端を歪めて笑う。

「さて、そんなことできるかしらね？」

これに対しアザリンも笑うと共に、右手を天に掲げた。

「ブライトフェザー——エクспанション!!」

同時にその言葉を口にする。

刹那、アザリンの全身が光に包まれた。これまで身に着けていた衣装が光の粒子に変換される。輝きの中に晒される肢体。その肉体を新たな装甲が包み込む。黄色を基調とした強化スーツ。アザリンの全身が包み込まれる。

そして——

「闇が世界を覆うとき、光の翼が雷撃となる。光翼戦姫エクスティア・マガカ、ここに推参！」

エクスティア——エクスティア・マガカが降り立った。

「エクスティア……素晴らしい」

変身を見て怪人は嬉しそうに笑う。心の底から歓喜の笑みを浮かべる……。

「凄まじい力を感じます。それだけの力に覆われた肉体。調べたい。ああ……調べて見たい。その肢体を隅々まで！……調べて見たい！……ああ……実験！……そう、実験です！……ホオオオオオオオ!!」

……調べて見たい。その肢体を隅々まで！……調べて見たい！……ああ……実験！……そう、実験です！……ホオオオオオオオ!!



バサツと怪人は翼を広げた。  
「実験ね。あんたはそういう衝動が肥大化された怪人ってわけか……。ま、その欲求が満たされることなんかあり得ないわけだからどうでもいいけどね」  
怪人の身体から魔力が溢れ出る。だが、動じることなくエクステリア・マギカは不敵に笑った。  
「アザリン……慎重にいけ。相手が何をしてくるか分からない以上、無茶はするなよ」  
ちよろどそんなタイミングで、物陰からこちらの様子を窺っている創真から通信が入る。  
創真はこれまで真理奈達と共に何度戦場に出ている。彼の戦況を見極める目は本物だといつていい。彼の指示に従えば概ね問題はないだろう。  
「慎重？ その必要は——ないわっ!!」  
だが、マギカは躊躇なく大地を蹴る。一気に怪人との距離を詰めるために!!  
「アザリン! 迂闊だっ!!」  
（迂闊? 違うわ。あんたがまどろっこしすぎるだけよ!）  
接近してPPを集中させた一撃を決める。それで全部終わりだ。慎重に動いて敵を見極めるなど時間の無駄ではない。だいたいこっちは中途半端なところで行為を終わらされて不機嫌なのだ。  
（べ、別にソーマともっとしたかったとかそういうわけじゃないわよ。ただその、中途半端ってのが身体に良くない気がするから! それだけよ! だ

からその……この怪人は気に入らない。気に入らないからとつと殺すっ!!」  
目の前の怪人に対する殺意を剥き出しにする。  
「接近などさせませんよ!!」  
が、敵は殺意を向けても怯みはしない。それどころか一言口にすると同時に、広げた翼を羽ばたかせた。  
すると翼から羽が撃ち放たれる。ナイフの様な鋭さを持った羽が、こちらに向かって飛んできた。  
「数が多すぎる!!」  
創真が焦りの声を上げる。確かにその通りだ。羽の数は数十——いや、数百。避けられるものではない。  
（でも、こんな問題なしっ!!）  
避ける必要などない。  
「PPフィールド展開っ!!」  
PPでバリアを作り出す。全身を包み込む。これにより羽をすべて弾き返す——とまではいかない。だが、皮膚の表面を少し切り裂かれるだけの被害で抑えることができる。  
腕や頬に少し切り傷ができた。だが、斬られた先からPPにより傷は塞がれる。だからダメージなどない。  
「これはっ!!」  
数百枚の羽でこちらを止めるつもりだったらしい怪人が焦る。  
「今更焦っても遅いわっ!!」  
怪人の至近にて拳を握り締め、PPを収束させた。  
「このエネルギー量はっ!!」  
「一発で終わりにしてやるわっ! 喰

らええええええっ!!」  
氣勢と共に、怪人の鳩尾みぞうちに向かって拳を撃ち放とうとする。  
「えっ!!」  
だが、その瞬間、唐突に全身から力が抜けた。収束させたエネルギーが霧散してしまふ。いや、それどころか、ただ立っていることすら辛い。  
「な……なんで?」  
戸惑いを口にしつつ、ガクッとマギカは膝を突いた。  
「力が……抜けて……これって……一体何が?」  
「ホッホッホ……私の攻撃を舐めた罰というやつです」  
勝ち誇った様に怪人が笑う。  
「ど……どういう意味よ?」  
「私の羽の一枚一枚には麻酔薬が仕込まれているのですよ。一枚受けたところでダメージは薄い。だから敵は避けきれない分を受けてくれる。その結果、麻酔が身体に回り——今の姫様の様になるということです」  
「く……こ、こんな程度っ!!」  
なんとか立ち上がろうとする。  
「無駄です」  
そんなこちらを嘲笑う様に怪人が蹴りつけてきた。  
「あぐあああつ!!」  
回避などできず、簡単に蹴り飛ばされてしまふ。マギカは地面を転がり、仰向けに倒れることとなった。  
「あ……アザリンッ!!」  
瞬間、百合が開発した銃を持った創

真が物陰から飛び出してくる。怪人を倒すことはできない。それでもアザリンを救いたい——そんな必死の表情を浮かべながら……。  
「この野郎っ!!」  
銃口を怪人へと向ける。  
「キイイイッ!!」  
「あぐあああつ!!」  
だが、引き金を引く前に創真はギムリアン達によってあつさりと拘束されてしまった。  
「そ……うま……」  
「ホッホッホッ、お楽しみ……実験の邪魔などさせませんよ」  
「じ……実験? 何をいつて? あんた……私にな……何をやる気?」  
身動きが取れぬまま、怪人を睨む。  
「簡単なことですよ。ホオオオッ!!」  
怪人が鳴いた。  
するとその鳴き声に反応する様にマギカが倒れている地面が持ち上がる。強烈な魔力によって姿を変えられた地面がいわゆる分婉台ぶんわんたいの様になった。その上にマギカは足をM字に開いた状態で拘束されてしまふ。手足がベルトで固定された。  
「な……なにこれっ!!」  
「いわゆる実験台という奴です。この上で……貴女の身体を観察した上で、どんな実験をするかを決めます」  
「か……観察? 何を?」  
「こうします」  
その一言と同時に怪人は強化スーツの胸元を掴むと、容赦なくこれを剥ぎ







銀河の悪事を暴く  
凛々しき捜査官！



死ねや  
コラア！

銀河特捜の  
犬め！

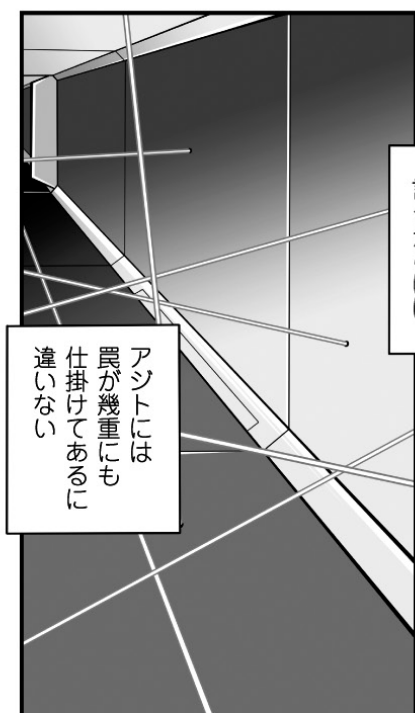
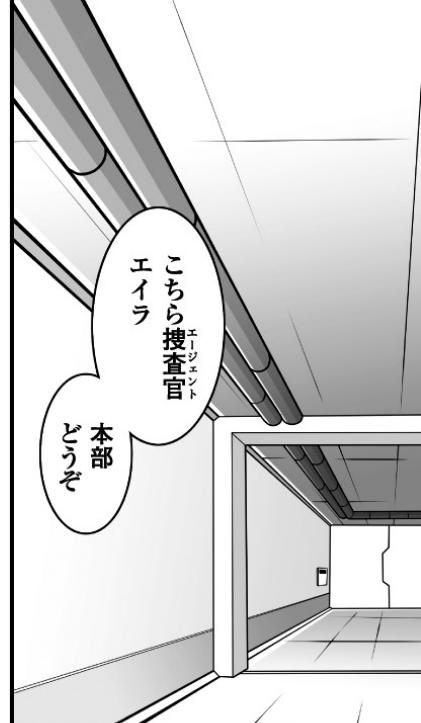
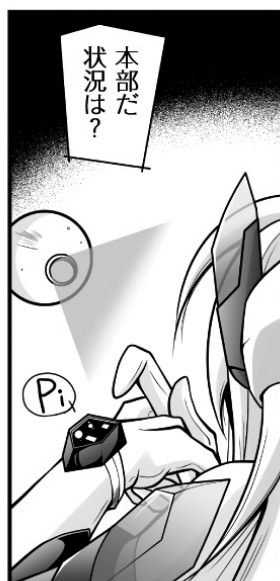
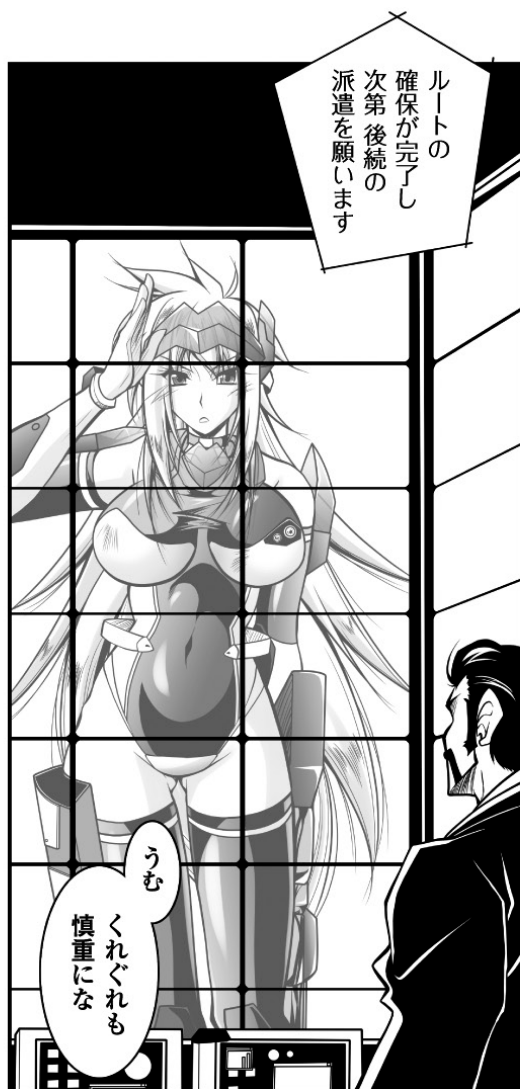


Ya!

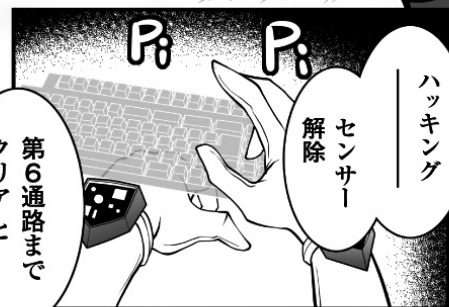
銀河特捜

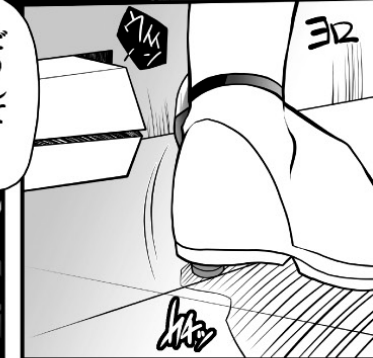
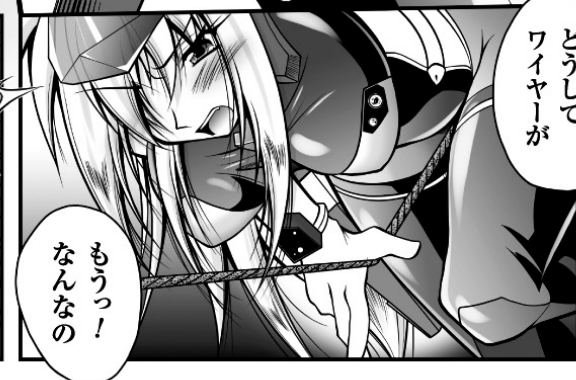
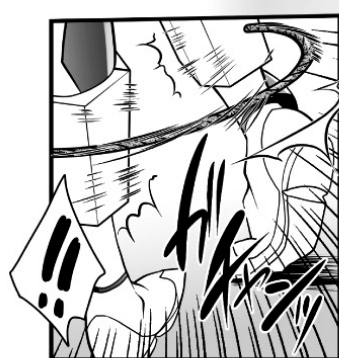
エーバエイト  
アイ

漫画 ぱふえ  
COMIC













禍学捜査員 Cyber Maid Yukino  
**サイバーメイド雪音**

小説／なるかく  
NOVEL

挿絵／イチナ  
ILLUSTRATION

潜入捜査官の冷貌を空める  
無情にして容赦ない機械陵辱!!





## 【シーンI】

高層ビルが立ち並ぶ都市。

スーツの男性や制服の女子学生が横断歩道をすれ違ったりリアルな日常。

そんな喧騒から遠く離れた、緑豊かな山の頂上に身を潜めるようにとある館があった。

「ねえ、ちよつとエッチ過ぎない?」

「胸もそうだけどスカートが……ね」

四階建てで新しい素材で作られているが古風な風貌は堂々としている。

立派な玄関をくぐったのは、下ろし立てのメイド服姿にはしゃぐ少女達。

この館で働く使用人として採用されたばかりの新人である。

「……また新しい子を雇ったのね」

元気な少女達をチラりと確認し、一階ロビーの窓ガラス掃除に戻る雪音。

あどけなさが残る愛らしい顔つき。

落ち着いた雰囲気半目は片方が水色でもう片方が黄色のオッドアイだ。

ハーフアップに纏められた黒髪は腰に届く長さで、後頭部で結われた部分は小さいツインテールになっている。

物静かで大人びた空気を漂わせる抜群に可愛らしい女の子だ。

「……もうちよつと」

身長は同年代の子と比べてちよつと低めで、窓の上側を掃除する際に爪先立ちとなって背を伸ばす。

「ん?」

彼女が磨く窓の外側。枠の縁に青い

小鳥が休みにやってきた。

小さな首を傾げ、雪音の格好を不思議そうに見上げてくる。

「……無理もないわね」

先程やってきた新人メイドと同じ衣装に目をやった。

スクール水着を彷彿とさせるデザインで、所々機械の装飾品が取り付けられたサイバー・スーツ型のメイド服だ。

(首元からアソコまで……スーツの生地はほとんど透けているし)

肌の色が分かつてしまうタイツよりもさらに薄い布が、手で安々と覆えそうな小さい美乳に密着する。

桃色の先端は当然透かされ、上から重ねられたミニケープによつて一応隠せてはいるが心もとない。

ちよつとの身じろぎでケープがめくれ、背徳気味な成長途中の乳房が可憐に、そして卑猥にはずむ。

「……時々、本当に隠せているのか不安になっちゃうわ」

括れを知り始めた腰やヘソの穴も、密着する生地のおかげで当然覗ける。

股のVラインよりも鋭く細い股生地さえも当然のように透明素材。

女丘のワレメに食い込み、男を知らない溝をくつきり浮かべせる。

(一応スカートがエッチな周りを包んではいるけど……)

エプロンドレスの前垂れがあらわられたそれさえ透けており、しかも驚く程に短くて動く度の中がチラつく。

頭はヘッドドレスの代わりに獣の耳

風な尖ったアンテナが飾る。

お尻よりも少し上に大きなリボンが付けられ、可愛らしさと露出のいやらしさを長い紐が強調していた。

足のニーソックスブーツは太股に食い込み柔らかさを強調し、透明な素材のせいで妖艶に際立たせてしまう。

(……あまり見ないでよ?)

首を傾げてばかりの小鳥に雪音は冷たい表情を緩ませ、頬を染めた。

身体を晒す為に作られたとしか思えない卑猥なサイバーメイドスーツ。

なぜ破廉恥極まりないこんな物を彼女が着ているのか。

(……元々の原因は、(禍学実験)にあるって言うてもいいわね)

それは、この世界で秘密裏に行われている危険な実験だ。

一見平和に思えるこの世には、災いをもたらす禍学実験を行うマッドサイ

エンティスト達が蔓延しているのだ。軍事用に産み出された合成獣。

感知されない即死ウイルス。

規格外で不安定な爆発エネルギーを量産するマシン。などなど。

(危険な実験を続ける彼らと唯一対抗出来るのは……たった一つ)

最先端の技術を平和の為に使う極秘組織(アルティアス)である。

雪音はそのメンバーの一人だ。

(今回の任務は、辺境にあるこの館の主人……禍学者が行う実験の情報を掴む事)

その為には、外部からほぼ遮断され

たこの館に忍び込むしかない。

入る方法はただ一つ。

若い女性のみを募集していたメイドとして働く事。

アルティアスの女性チーム全員で潜入を試みたが、唯一採用されたのは雪音一人だけだった。

(今までに沢山の禍学者達を見てきたけど、こんなケースは初めてね)

今回のターゲットが行う禍学実験は卑猥なマシン製作というもの。

それもただの性玩具ではない。女性を完璧な性奴隷に洗脳・調教する為の製品開発だ。

(今着ているこのメイド服も、実はあの禍学者が作ったものだしね)

幸いにもこれは開発途中のサンプルで、洗脳されるような仕掛けはない。

それでもいやらしい格好になる事は変わらず、冷静に任務をこなしてきた雪音も最初は戸惑ったものだ。

(でも、これも任務……私が証拠を突き止めないと……)

「おい何をやってる!!」

突然、ロビーに鋭い叫び声が響き窓の小鳥が逃げる。

何事かと目をやれば、肩を怒らせて足を踏み鳴らし、玄関にやってくる少年の姿があった。

恐らく雪音と同じ年だろう。

背丈は小柄な雪音よりも大きく、平均的な男子の身長だ。

平凡な顔に怒りの皺を寄せ、寝癖で乱れた短い髪を掻きむしる。

着古されたシャツとずれて穿かれたズボンの上から、薄汚れた白衣を羽織っている。

「触ったな……ッ」

彼が刺す勢いで指を向けた先は。

「え？ え？」

先程着いたばかりの新人メイド達。

その一人が手にした掃除機だった。

「ソレに、触ったな!!」

「あ、あの私は掃除を——」

「オレの許可なく触るな!! お前のご主人様は誰だッ？ このオレだろ!!」

怒涛の勢いで叫び、説明を遮る。

疎み上がった彼女からひったくるように掃除機を奪ったこの少年こそ、館の主人……禍学者の刃だ。

雪音と変わらない年にもかかわらず、

ずば抜けた知性を持つ天才発明家。

そして卑猥な道具を日夜研究している禍学者である。

「クソ……! たでさえイライラして

るのに無駄に頭を使わせるなよ!!」

右も左も分らない子に批難を浴びせ続け、周りの者が庇う暇すらない。

なんの変哲もない掃除機に触れた事を口実に、溜まったストレスを好きなだけぶつけていると思えない。

「全く使えねえ女だッ。ああもういい帰れ! 二度と来るな!! うせろ!!」

「ッ……わ、私は綺麗にしようッ」

あまりにもヒドい言葉の暴力に限界を迎えた新米の子は、大粒の涙をポロポロと落として呟く。

刃のイラだった眉毛がさらに寄る。

「オレの命令もなく口答えしたな!!」掃除機をロビーに投げ捨て、拳を握り、振り上げた。

「ご主人様」

一瞬時が止まる。

美しい氷のように透き通った雪音の

声が玄関に響いただけで。

刃は拳をビタリと止め、新たな怒りの矛先を向けてきた。

「食堂にご希望されていたフルーツのケーキ。それに合いそうな私のお勧めの紅茶をご用意しております」

必要な事だけを口にして、笑顔もなく礼をする。

その姿を見るなり刃は途端顔色を変え、振り上げた拳を下ろす。

「おお、丁度甘いものが食べたいと思

ってたところなんだ」

妖しい笑みでこちらへやってくる。

その隙に、泣きじゃくるメイドの周

りに同期達が集まってゆく。

「……なんとか止められたみたいね」アルティアスで戦闘訓練も積んでいる雪音は力づくで止める事も出来た。

しかし潜入中である以上、刃に気付かれる訳にはいかない。

（証拠を消されたら逃がしてしま……ごめんなさい。任務の為とはいえずぐに止められなくて）

新米のメイド達は全員文句を残しつつ玄関から出てゆく。

こういう理由から、この館で働いているのは雪音ただ一人だ。

「いやあ、やっぱりお前は気が利くメ

イドだなあ」

思わせぶりの口調の刃に背を抱き押され、雪音は無理矢理歩かされる。

「まあ面接で一目見た時から分かってたけどな。ははは!」

彼がご機嫌なのは好物のケーキが染しみだから。だけではない。

「んッ!? ご、ご主人……様ッ」

「ん、いい匂いだ。これは髪の毛と……」

「お勧めの紅茶の匂いかなあ?」

舐めしやぶるように囁く禍学者は、乙女の美しい黒髪に鼻をうずめる。

（うあ、や、ヤダ……近過ぎ、ああ）遠慮ない鼻息が繊細な耳周りや首筋に吹きかかる。

髪を嗅がれる行為と、ねっとりした鼻腔の熱氣に上ずった声を漏らしてしまつて恥じらう。

「前よりも少し大きくなったか?」

冷静を保とうとする中、刃は背中を擦っていた手をクモみたいに蠢かせて下へとずらす。

「はうんン!!」

ハイレグ水着タイプの衣装ゆえにほぼ剥き出しの尻尻。

そこに欲望に染まった指が沈み込み、感触を楽しまれて拒みそうになる。

（こ、これも……任務の為……ッ）

必要な事だと自身に言い聞かせて平常を保つが、どうしても頬は赤い。

「どうした熱か? 顔が赤いぞ」

雪音の悶える仕草や反応を堪える姿を刃は味わいながら囁く。

「オレがベッドまで送つてやろうか?」

看病してやるぞ……ずっと」

「い、いえ。大丈夫です」

「ならいいが……ハハ、お前は本当に

完璧なプログラムみたいにおどく女だ。オレの理想の、可愛い機械みたいに」

意味深な言葉に違和感を覚えたが、話題を逸らされてしまう。

「後もう少しの研究があるんだが、中々上手くいかなくてなあ……あ、こ

の話はケーキを食べながらいいか」

彼はさらに距離を詰め、尻を揉むどころか体中を触ってくる始末だ。

（……これ以上、捜査に時間を掛けられない。今日中に終わらせないと）

いつも沈着冷静な雪音だが、年頃の少女でもある彼女は刃の笑みに危険と焦りを感じていた。

◆◆◆

深夜を迎えて静まりかえった館。窓から零れる優しい月明かりが真っ暗な廊下を照らす。

「……誰もいないわね」

四階にいくつもある客室の扉。その一つがひっそりと開き、中から

出てきたのは雪音だった。

（終わらせたい仕事の為に泊まらせて欲しいって言ったら、まさか本当に認められるなんて）

何か目的があるのかと部屋の監視カメラチェックや、扉や窓に防犯センサーを仕掛けたが全く問題なかった。

命令以外の行いを嫌う刃らしくないが、仕事を口実に今日中に調査を終わらせられるなら小さな疑問である。



とある銀河  
争いが絶えぬ時代に  
名の知れた  
賞金稼ぎがいた

弱きを助け  
強きを挫く  
流浪の戦士

年齢・性別・素顔すら  
誰も知らない

青いバトルスーツに  
身を包んだヤツは  
こう呼ばれていた

銀河に煌く青き流星  
正義の賞金稼ぎ推参！

バウンティハンター  
賞金稼ぎ  
ブルー  
Blue The Bounty Hunter  
ゴルー

～囚われし機械姦獄～

漫画 しぶき  
COMIC 飛沫おろし

コードネーム  
『ブルー』と

今日でお前の  
伝説とやらも  
終わりだぜ

ククク…  
伝説の賞金稼ぎ  
ブルーねえ…  
こんな所で  
捕まっちゃって  
ザマアねえな

おい！  
起きろ！



ようやく  
お目覚めか

偽の救助要請  
ビーコンに

ひっかかるとは…

お前もとんだ  
お人好しだな  
ブルー

く…っ

こいつは裏社会で  
悪名高い賞金稼ぎ  
ダゴン…！

クソッ…アレは  
畏れたのか…

鎖で繋がれて  
いるが…

シヤッ

これなら隙を見て  
逃げられるかも  
しれない

適当に挑発して  
逆上させてやる

ホッ

放せ！同業者が一体  
どういふつもりだ！

お前のターゲットは  
私ではないだろう？

何のつもり  
だって…？

散々俺様の縄張り  
荒らしやがって…

フクッ

今までの恨み  
思う存分晴ら  
させてもらうぜ

だが…ただ  
いたぶるんじゃ  
面白くねえ

グイッ

まずは  
パワードスーツを  
ひん剥いてお前の  
間抜け面を拝ませて  
もらおうか…



おいおい  
まさか…

コイツは  
驚いた!

フン…  
それがどうか  
したか?

女だからと言って  
舐められる  
筋合いは無い

それにお前の  
ちやちな拷問に  
屈するつもりも  
さらさら無い

あの伝説の  
賞金稼ぎブルーが  
女だったとはな!

さあ挑発に  
乗ってこい!

ほお…そうか

お前の雇い主を  
吐かせてからバラして  
内臓でも売り飛ばす  
かと思ったが…  
気が変わった

何も売れるのは  
内臓だけじゃねえ

これだけ上玉なら  
十分「商品」になれる

商品…!?

コイツで身も心も  
完璧に仕上げて  
やるぜ…!

フン…なんだ  
自白剤か…?

ありとあらゆる  
毒に耐性を付けた  
私に効くとも…

自白剤…?  
そんなヤワな  
もんじゃねえ

ちゅう

こいつは  
感度10倍の  
裏ドラッグさ  
一発打って  
調教すりやすぐに  
従順な雌奴隷の  
一丁上がり!

調教…!

お前は  
どうかな?  
ブルー

スレイブ  
システム起動

快楽に耐える  
訓練は受けて  
きたか?

快楽だと…?  
こんなオモチャで  
私をどうにか  
できるとでも—

乳首吸引モード  
開始します

クソッ…乳首に  
突起が絡み  
ついてくる…

吸引されて…  
伸び…っ!?

無数の突起…?  
なんだこの  
機械は…

カチ

ビクッ

…っ!?

ズズッ

ズズ…

ゴッ

きゅん

キュウッ

ヌヌ

きゅん

ぐんぐん

ヌ

ヌ





吸引

刺激

確保

なんだ  
この感覚は……！  
体内に響いて  
くるような……

大丈夫だ……  
この私が耐え  
られない拷問など  
あるはずが……

乳首感度をさらに  
高めるため吸引と  
刺激を繰り返します

体の力が  
抜ける……っ！

快感による  
クリトリスの  
勃起を確保

く……そお……っ

こんな……  
ことで……！

吸引……刺激……  
吸引……

そんな……  
繰り返しられ  
たら……っ！

気高き女将校を襲う無機質な  
ディルドー地獄!!



北風の  
**アンナ・無残**  
～機械に犯される女将校～

小説 くろ いづみ **黒井 鷗** 挿絵 **もう**  
NOVEL ILLUSTRATION



——軍事国家、リボリア。一部特権階級による圧政が続く、取り残された国。

——諸国が満喫する自由を自分たちも享受するべく、被支配者層は自らを革命軍と名乗り、各地で蜂起した。

装備も資金も十分ではない烏合の衆に対して、正規軍には圧倒的優位が約束されていた——はず、だった。

だが正規軍の予想に反し革命軍を援助する集団が現れた。圧政を良しとしない自由主義の旗を掲げる超大国だ。

超大国たちの後押しと被支配者層の不满が相乗効果をもたらし、革命軍は正規軍の予想を覆し、各地の戦略的要点を次々に制圧していった——

※ ※ ※

「私は君たちを信じている——」

まるで定規で線を引いたように、規則正しく並ぶ女性兵士たち。彼女たちは二万人いる正規軍の中でも数少ない女性兵士、総勢百人だ。

彼女たち百人全員が、微動だにすることなく、一心不乱に演説台の上に立つ一人の将校のすりりとした立ち姿を見つめ、その一挙手一投足を見逃すまいと集中していた。

「私は君たちがこの国を混沌から救う者たちであると信じている——」

凜としながらもよく通る声は、よく手入れされた小剣にも似ている。

そんな通る声が、女性としては長身な、百七十センチの体軀から発せられれば、マイクなしでも十分に声が響く。

彼女が大きいのは上背や声だけではなく。武骨な軍服の上からでも分かるほどに豊満なプロポーション。猫じみた大きな瞳。女性が憧れる身体特徴を、彼女は幸運にも全て持ち合わせていた。彼女の名はアンナ・ヤラレネーニア。軍学校に一年飛び級で入学した彼女は、その軍学校を主席で卒業し、軍属になつてからは多数の戦果を獲得し、若くして将校となつた才媛である。

「私は君たちがこの国に戦乱をもたらす者たちを打ち倒すと信じている——」

男尊女卑が根強いリボリアで将校になるには、才能はもちろん、尋常ではない努力が必要となる。リボリアの歴史にも数少ない若き女将校を見つめる乙女たちの視線は、強い憧憬や、それ以上の感情に満ちていた。

「私は君たちが——平穩を取り戻したこの国で、最も称えられる者たちになるだろうと——心から、信じている」

そう言い終えて演説台から一步引くと、今まで身動き一つしなかった観客の兵士たちが、アンナに向けて一斉に、割れんばかりの拍手を送ってきた。

一糸乱れず自分を称える兵士たちに満足するでも、微笑むでもなく、表情を崩さぬまま踵を返して、演説台から背筋を伸ばしたまま下りて行った。

「いやはや……素晴らしい演説でした」

去りゆく道すがら笑みを浮かべながら話しかけてきたのは、演説を行った基地を監督する将校であった。

頭の毛も寂しくなってきた初老の彼だが、しかし未だ若いアンナに対して、過剰なほどの腰の低さで接してくる。

「いやあ、未だお若いのに、堂々とした、素晴らしい演説でしたなあ」

長い歴史のあるリボリア軍でも数少ない女性兵士の中で、将校になった人物は、さらに片手で数える程度しかない。

そんな中でも、二十四歳という歴代最年少で女性将校に選抜された彼女は、リボリア兵士なら一度は名を耳にしたことのある有名人と化していた。

「流石は、ヤラレネーニア家のご息女、といった所ですか？ この基地の兵士たちも、名高き貴方の演説を楽しみにしていたのですよ」

満面の笑みを浮かべながら近づいてくる隊長の姿が、アンナは後ろ手に組んであるはずの両手を揉み手しているようにありと感ぜられた。

「演説には——年齢や家柄は関係ありません。私は今後の作戦における彼女たちの不安を緩和したにすぎません」

「はは、そう謙遜されるものではありません……」

笑う隊長に対して、彼女は無表情を貫きながら、ほんの少しだけ斜に構えてから、冷たい溜息を吐いた。

「そう謙遜されるのは——」

「はい？」

「——ご自分の演説では、あれほどの拍手は得られないから、でしょうか？」

血色のいい可憐な唇から飛び出した言葉の意味を、隊長はすぐに把握することができず、二人の間に一瞬の間が生じてしまう。アンナはそれを見逃すことなく、矢継ぎ早に一言添えた。

「では、私はナズナチーニア基地に向かいます。ご武運を」

そういつてからアンナは、将校用コートを北風に翻しながら、用意された軍用車に乗車し、その場を去った。

「——ふん、『北風』め……」

基地隊長は彼女が乗り込んだ車が見えなくなるのを見送ってから、表情を崩すことなく、忌々しげに呟いた。

「『北風』。彼女が誰に対しても——それこそ、本来敬つて然るべきである男性や年上の人物であっても、冷淡な態度を崩さないことから、有名人である彼女についての異名である。」

「まだ自分の才覚で将校になったと勘違いしているな——ふん、ヤラレネーニアの家に生まれなければ、あんなに早く将校になど——」

偽りの好々爺の皮を脱ぎ捨て、小娘のくせに生意気な態度に、基地隊長は腹を立てながら陰気に呟く。

「——生意気な娘め、すぐにひどい目に遭うだろうよ」

若き才能に醜く嫉妬する男は、誰にも聞こえないように小さく、呪詛めいた言葉を吐き捨てた——

※ ※ ※

——若き女将校は、窓の外に視線をやりながら、物思いにふけていた。



「流石は、ヤラレネーニア家のご息女、といった所ですか？」

「ふん——」

今思い出しても腹が立つ。私が今の地位にいるのは父が将校だから、という単純な理由ではない。

父は努力もしていない人物を、自分の娘というだけで将校に推薦するような無能な人物ではない。

むしろ最初アンナが軍人になろうとした時、反対したほどだ。

「やっぱり、男という生き物は——」

アンナは小さく呟く。男という生き物は、やはりろくでなしだ。

年上の男は単なる若造以上に女である自分を軽んじ、私と比べて全て劣っている男のほうを高く評価する。

同年や年下の男たちは、なぜあんな女が——と、私が女というだけで嫉妬の炎を勝手に燃やす。

そして欲望に忠実な男どもは——

「っ——」

その視線を思い出しただけで、全身に虫唾が走る。ただの脂肪の塊に、どうしてあそこまで下種な表情ができるのか——万人が憧れるプロポーションを持つ女は、忌々しく拳を握った。

——この国の女性の地位はどうしようもなく低い。軍人だけではない。多くのリポリア国民が、女性という存在は無力で弱いと思っている。

その価値観を打破するには、自分のように優秀な女性が——否、この私が、このリポリアという国で表舞台に立ち、

この国の女性の価値観を根底から変えていくことが必要なのだ——

「——ん？」

ふと、風景に目を戻すと、車が、ナズナチーニア基地に向かうのには通る必要のない道を走っていることに気が付いた。

——新兵でも運転しているのか？正しい道を教えるため、アンナは目の前の席にいた運転手に話しかけた。

「目的地はナズナチーニア基地だぞ？」

「ええ、存じています」

運転手の声が、アンナの指摘を遮った。初めて聞く声だ。

（……ふん）

「——では、道が間違っていることも存じているというのだな？」

嫌味がかかった口調で言い放った言葉

を、運転手はハハ、と軽く笑い流した。

「ああ、それは——」

シウウウウッ——！

突如として、大きな音を上げながら、座椅子から白い煙が立ち上がった。

「な、なにっ？！ げふっ、げふっ……」

予想もしない緊急事態に、思わず驚きの声を上げるアンナ。しかしそれと同時に白い煙をいくらか吸ってしまった、思いきりむせてしまう——猛烈な眠気（さ、催眠ガス……！）

催眠ガスを体内に取り込んで朦朧とする意識の中、彼女の聡明な頭脳は、この突然な襲撃の犯人を推理する。

「き、貴様……か、革命軍っ……！」  
かすむ目で運転手の顔を睨むアンナ

だったが、その運転手の顔を拝むことはできなかった。

——彼は、大型のガスマスクを着けていたのだ。

「——今、俺たち革命軍のアジトに向かっているんですよ、美しいアンナ殿」

こもつていても、口元がやけているのが分かる声に気高い女将校は異界の感情を覚えた。だが、もうどうにも身体が動かない。

「く、クソっ……！」

そしてとうとうアンナは気を失ってしまった。

——そう、彼女は革命軍によって計画的に拉致されてしまったのである。

※ ※ ※

——それは、密室内での一方的な蹂躪だった。椅子に縛り付けられ抵抗はおろか受け身すら取れない状況で、三人の男はアンナに暴行を繰り返した。

女だからと侮ったのか、それとも躊躇したのか、顔面にはほとんど傷はついていない。その代わり、軍服の下は痣だらけになってしまっているだろう。

——そんな激しい暴力を振るわれたアンナは椅子に縛り付けられた状態のまま床に目を閉じて倒れ込んでいた。

すわ、死んだのか？ いや違う。彼女は全身に響く痛みに声を上げてしまわないうちに、静かに静かに、ゆっく

りと呼吸を整えていたのだった。

「ハア……ハア……ハア……」  
三人の男たちはぜえはあと荒い息を吐きながら、目の前の女のしぶとさに

困果でいた。

「あの女、口を割らない……」

「本当に情報を持っているのか……？」

汗だくになりながら弱音を吐く二人の部下を、上官らしい兵士は——一人ずつに張り手を食らわせた。

「ててて……」「つつつ……」

「阿呆共が……こんな小娘一人から何にも聞き出せないのに、なんだその間抜けな答えは!? ああ!!」

大きく怒鳴る上官の勢いに押され、シユンとなる部下二人を見て、折れかけた自尊心が回復したのか、横たわるアンナの傍に近づき、彼女を見下ろす。

——椅子に縛り付けられたまま横たわる姿はリポリア軍の最年少女性将校とはとても思えぬ無様さだった。

上官らしき男が、アンナを無理やり椅子ごと起こし、またも顔を目前にまで近づけて——今回は、多分の苛立ちを感じさせながら——話し始める。

「だんまりを決め込むのいいが——いいかげんデータXについて話してもいいんじゃないか？ ああ!!」

データX——彼らがそう呼ぶそれはリポリア軍の秘密データ、らしい。

彼らはヤラレネーニア准将の娘であるアンナならそれを知っていると踏んだらしいが、アンナは何も知らなかった。いや、知らされるはずもない——

「——もしお前が『何も話さない』って態度を貫くのなら——こつちも、それにふさわしい態度を取るしかなくなるぞ……?」

そんなこととも知らずにアンナを睨む男に、アンナは——ブッ！

「！っ、くそっ……！」

——思いきり、唾を吐きつけてやった。慌てて顔を拭う男に向かって、アンナは初めて口を開く。

「——リボリア国民の面汚しめ。下劣な革命軍め……お前たちのようなりボリアの恥さらしに、答えることなどいや、口を開く用など、何もない」

部屋の三人の目に、怒りの感情が灯るのを感じたアンナだが、決して発言を止めることなく言葉を紡いでいく。

「さっさと殺すなりなんなりすればいい——リボリアは、決してお前たちを許しはしない……絶対にな」

絶対零度をまとうせた言葉に、男たちは逆に奮起したらしい。三人は皆怒りの色をにじませながら、アンナのことを同じように睨みつけた。

相対する六つの瞳と冷たい双眸が幾何か重なり合い火花を散らす——

「おい、『紳士』を持ってこい」

ふいに、上官が呟く。

「……いいんですか？ もしかしたら、あの女、壊れちゃうかも」

「構いやしねえさ……こいつのクソッタルなおすまし顔が、俺は死ぬほど気に食わねえ……早く持つてこい！」

上官に怒鳴られたことにも怯えることなく、部下が一人部屋を出ていった。

「さて——」

振り返った残りの二人の顔が、優越感から醜くにやける。

「お前が女の身体に生まれたことを死ぬほど後悔させてやる——」

※ ※ ※

アンナは目隠しをされ、二人がかりで部屋を移動させられた。数分歩かせられ、階段を下り、とある部屋に入れられ——ガチャリと鍵のかかる音がした。

目隠しを取ると、窓もない部屋だった。光一筋差さない部屋を照らすのは、粗末な電灯が一つだけ。

——その電灯の下、スポットライトが当たったように照らされていたのは、座の部分がUの字に切り抜かれた鉄製の武骨な椅子だ。

「そこに座らせろ」

上官の指示によりアンナは二人がかりで無理やりに鉄椅子に深く座らされた。何をやるつもりだ——警戒するアンナだったが、次の兵士たちの行動に思わず声を上げてしまう。

「ど、どこを触って——」

二人の兵士はアンナの両脚を掴み、なんと手すりの上へと無理やりに上げて、Mの字に似た形にしてから、そのまま縄で縛ってしまった。

「つく……！」

そのせいで、下品にも大きく股を開いた状態の、かなり無理のある体勢になつてしまう。

「おら、動くんじゃねえ！」

しかし拘束はまだまだ終わらない。男たちは次にアンナの両腕を取ると、頭の後ろで手を組ませてから、荒縄で

ぎちぎちに固く結び、胴と背もたれを

ぐるぐると何周もして縛り付ける。そして胴縄と手首の縄をロープで拘束すれば——あつという間に、

「くっ……！」

——胸を無理やり反らせたせいで、アンナがコンプレックスを抱いている胸が不意ながらも強調される形になつてしまい、アンナは歯噛みする。

「どうだあ？ なかなかにキツいだろ？ その体勢はよ……」

後ろに下がった二人の代わりに、暗闇から現れた上官が、ニヤニヤと品のない笑みを浮かべながら、ぬうつ、と現れた。

「ふんっ、こんな体勢——」

痛くも痒くもない、と言おうとしたアンナだったが、彼の手に握られている光るものに、一瞬言葉を失った。

（私も——とうとうここまでか）

それは、突き刺せば確実に死に至るであろう代物——かなりの刃渡りがある、軍用ナイフであった。

「何ビビッてやがるんだあ？ こいつが怖いのか？ ああ？」

二の句が継げなくなつたアンナに、怯えていると勘違いしたのか、強気な態度に出ながら、凶器を持つて近づくと、

「——刺すなら刺せばいい。切るなら切ればいい。好きに——するがいいさ」

間近に近づくと死の恐怖。訓練も実戦も経験したことがあるアンナであつたが、その時は自身の状態はどんな状況

にも対応できるフリーの状態だった。しかし今は、弱点を晒した状態で縛

られ身動き一つできない。反撃はおろか抵抗一つもできないのだ。

「あれだけ挑発すれば、仕方ないのなことか——」

捕らえられた時点で、自分の命はないものと覚悟はしていたが——アンナは、静かに目を瞑った。

こんな奴らに、恐れは見せられない。「——覚悟しろ」

ナイフで頬を撫でてから、男のナイフが——一気に振り下ろされた！

「なっ——!?」

だがその刃が、鍛えられた彼女の肉体に刺さることはなかった。刃が貫いたのは——彼女が身にまとう軍服だ。

「な、何のつもり——」

刺されるものとはかき思っていたアンナは、混乱し油断していた——

「きやあつ！……き、貴様らっ！」

そんな時、刃を入れた所から、一気に左右に割り開かれたせいで、北風とあだ名されるアンナとは思えぬ、なんとも愛らしい声を上げてしまった。

「ふふふ……かわいい声が聞けたぜ」

その声に満足げな男たちは揃って笑い声を上げた。

「つく……！」

アンナが強い語気で問い詰めると、上官らしき男は彼女を鼻で笑つてから、彼女の剥き出しになった、雪のように白い胸元に、無礼にも触れてきた。

れることが——」

そういうながら肌の上を指が滑り降りていき、アンナの露わになった黒のブラジャーをむんずと掴む。

「よおっ！」

ブラのカップとカップを繋ぐ部分を、男は無慈悲にナイフで切断した。

「っ——！」

アンナは声にならない叫びを上げる。切断されたブラジャーは最早下着として機能することはない。

つまり、アンナの重量感ある量の乳房が、一気にぶるんつ、と軍服の裂け目から、下劣な男たちの視線に晒されてしまう。

「おおお……いいモノ持つてるじゃねえか……ククク」

低い笑い声を漏らしながら、男はそのしつかりとした重量に触れてきた。

「んんっ……！」

初めてのことに——アンナは男を信じてことができず、未だ処女のままだった——女将校は身じろぎしてしまふ。げ、下賤な者どもめ……！」

アンナの言葉を意図的に無視しながら、男はナイフを移動させた。

「じゃあ、こつちも……」

そういつて移動したナイフの行先に、アンナの目が開かれる。ナイフは無慈悲にもアンナの下腹部へと伸びていたのである——

「ま、まさか——」

「当たり前だろうが！」

ビィッ！

とうとうズボンまで、ナイフの刃によつて無慈悲に裂かれ、ブラとお揃いのアンナのショーツが露わになる。

「っ……！ き、貴様らまさか——」

「そのまさか——というか、それに決まってるだろうが……！」

アンナの最悪の予想は的中した。目の前の男は、その指を晒されたショーツに伸ばしたのである。アンナは思わず声を上げてしまう。

「ひゃっ——」

兵士の武骨な指が、ショーツの上から、自分以外の誰にも触らせたことのない場所に無遠慮に触れてくる。

（ふ、触れられている——ち、膣につ、ヴァギナにつ……！）

性を嫌悪してきたアンナは自慰行為すらしたことがなく、触れるとしても身体を洗う時に少し触れる程度だ。

しかし、目の前の男はそんなことお構いなしに、ぞりぞりと陰唇を撫でまわし、下品な笑みを浮かべていた。

（革命軍に——この国を裏切った者に、性器を触られている——！）

処女将校は、未知のおぞましい体験に身を震わせるが、雄である兵士は厳つい顔をした将校のセクシーな下着に、興奮しているようであった。

「いやらしい下着つけやがつて……！」

「ひっ、あつ、んっ、んんっ……！」

生娘であるアンナは、初めて秘部を触られる感覚に、思わず恐怖の声を上げてしまう。

「ほほう……なかなかいい声出すじゃ

ねえか……もつとしてやろうか？」

しゅっ、しゅっ、しゅっ……！

「あくっ……！ つうう……ふうっ！」

男は経験があるらしく、的確にアンナのスリットに沿って二本の指を何度も往復させていく。

一方アンナは初めての、くすぐったいような、痒いような感覚に無様に声を上げてしまうことしかできずにいた。

「や、やめろっ……下劣な奴め……！」

アンナはきつぱりと告げたつもりだったが、処女を失う恐怖のせいで、声が細かく震えてしまう。

「ハハ、なんだあ？ 怖いのか？」

そんな弱気な反応に気を良くした革命軍兵士は、さらに秘部を弄っていく。

しゅく、しゅく——じゅくっ！

だんだんと、股間から聞こえてくる音に水気が混ざりだし、暗い部屋全体に響き始めた。男が驚きながら尋ねる。

「お？ お前まさか……こんな状況で感じ始めてきてんじゃねえだろうな？」

「そ、そんなわけないだろう！」

反論するアンナだが、男は疑いの視線を浴びせ続けている。当然、その最中も、ショーツの上から膣口を撫でることを忘れない。

じゅくっ、じゅくっ、じゅくっ……。音もずいぶん水っぽくなり、そしてショーツにもじんわりと染みができ始めていた。

「おーおー、もうこんなに濡れちまつたぜ……革命軍にまんこイジラれて感じるだなんて、トンだ淫乱将校だぜ」

ショーツの上に染み出した液体を、指で掬ってその指先で弄ぶと、にちゃあ、と音が聞こえてきそうなほどに水分が糸を引いて、ぶつりと切れる。

「ち、違う……これは防衛反応だ……！ 断じて、感じている訳では——」

——ぐちゅうっ！

「ひ、ひいっ！」

一際大きい水音と共に、アンナの絹を裂くような悲鳴が部屋の中に響く。

「こんな派手に濡らしておいて感じてねえわけねえだろう、おい……！」

——とうとう兵士の指が、クロッチを押しつけて直に秘裂をなぞり始めたのだ。

アンナの指より数倍は太く、そして硬い指を、粘膜が剥き出しになっている膣穴へと、無理やりに押し込んだ。ぐじゅっ、ぐじゅっ——

「あつく……うあつ、はあつ……！」

内臓へと直に触れられ、ぞりぞりと内側を指の腹で撫でられているのを、アンナははつきりと知覚できる。

自分の指すら入り込ませたことのない部分に、男の指——しかも、リボリアを裏切った革命軍の男の指——が、こうして入ってしまったという——

まったくの未経験な感覚に身もだえするアンナだが、胸と股間を強調する卑猥な体勢で椅子に縛り付けられた身では、どうすることもできない。

「へっへっへ……そう嫌がるなよ……」

身もだえするアンナの姿を見て、兵



無機質な機械による  
容赦なしの**強制絶頂!**

科学特装

三ツネ

博士の机械实验レポート

小説 斐芝嘉和

挿絵 榎糖練乳



「ちええいっ！」

逆襲に振り上げた切っ先が、攻撃態勢に入っていたドローンを叩き割る。結晶状に砕けた装甲の破片が、周囲の壁や天井にペタペタと貼りつく。

国際テロ組織テウルギアの、地下兵器工場。その一番奥の、天井が高く殺風景な倉庫のような広間。

「粘着シートで私の動きを止めようなんて、稀代のマッドサイエンティストにしてはお粗末ね！」

特殊合金でできた長剣を構え、凜と言いつつのは、リスのようにクリクリとした瞳が愛らしい、栗色の髪をツインテールにした小柄童顔の美少女。自ら開発したパワードスーツを身に纏い、悪の秘密結社と闘う科学者だ。

名は、ミーネ・カシワギ。

ロボット工学の権威だったカシワギ博士の孫娘で、自身も十二歳でMITに入学した天才。NASAの研究所に勤めていたころ、テウルギアが引き起こしたメルボルン事件によって両親を喪い、復讐の女神と化した。

そして、いま――。

「もう逃げ場はないわよ、観念しないバルツェル博士！」

背部のスラストを吹かせて銃弾の雨を回避しつつ、宙を飛んでドローンを叩き斬るミーネ。

細く小柄な体型なうえ、振るう剣は自分の身長より長いのだが、白く輝くパワードスーツのおかげで動きは機敏だ。死角から迫る無人機の攻撃も、A

Iが警告を発してくれるので難なく避け、返す刀で叩き落とす。

「ぬうう……ここまでか」

広間の奥の壁際に追い詰められ、悔しそうに歯噛みしたのは、頭頂部が禿げ上がった白髪の小男。テウルギアの主要幹部のひとり、デニス・バルツェル博士。

かつてカシワギ博士のライバルだったこの男は、元々はナノマシンの専門家だ。壁や天井に張られた粘着シートも、特定の金属分子だけ強力に吸着するという不思議な性質を帯びている。

そのせいで、ミーネが持ち込んだ銃は壁から取れなくなってしまった。同時にドローンに襲われ、咄嗟に剣に持ち替えたからよかったが、無理に引き剥がそうとしていればパワードスーツごと壁に貼りついて身動きできなくなっていただろう。

数分前には無限に思えたドローンも、とうとう最後の一機となり、横薙ぎに振った剣であつさり破壊。

「金属しか貼りつかないのだから床にも張っておくべきだったわね、博士」

禿頭の小男の前にふわりと降り立ち、その喉元に長剣の切っ先を突きつけるミーネ。

父母の仇だが、命を奪ったりはしない。テウルギアの全体像はまだまだ分からないことばかりだから、生かして捕まえ、情報を引き出さねば。

対する博士は――。

「……うむ、計算通りだ」

不意に不敵な笑みを浮かべ、わずかに右へ動いた。

「動くな！ 下手なことをすれば、手足を斬り落とすわよ！」

「そんなことができるかな？」

「できるわよ！ 命さえ無事なら、ほかは別に……」

言いかけたミーネの顔が、不意に強張る。いままで重さを感じたことのないパワードスーツが、急にズシッと重くなったのだ。

同時にHMDに表示される、エネルギー供給断絶アラーム。

「そ、そんな……ッ!」

蒼褪めているうちに、AIの表示がすべて消えた。エネルギー供給が断れたため、パワードスーツのすべての機能が停止したのだ。

巨人の筋力と鳥の機動力を与えてくれる魔法の鎧が、いきなり全身を押し潰す錘<sup>マレット</sup>となった。ミーネの細い身体で支えられるわけがなく、その場に倒れてしまう。

「その玩具は、指向性電磁波を用いた非接触型エネルギー供給だろう？ ならば、妨害することなど簡単だ」

笑った博士がミーネの傍らに近づき、白衣のポケットから小さな注射器を取り出した。

「か、簡単なわけがない！ 妨害されないよう、中継器をあちこちにバラ撒いてあるのに……あつ!」

「そうだ、粘着シートだ。お前が砕いたドローンたちの装甲が、壁や天井に

貼りついて乱反射空間を作り出した。その中で妨害電波を発すれば、すべての中継器をまとめて無効化できる」

とはいえ、ミーネが入り口の傍にいたのでは効果は薄い。妨害が中途半端な場合、動力供給の低下を検知したAIが警告を発し、完全な無力化が成る前に仕掛けをミーネに気づかれてしまいかもしれない。

だから博士は一番奥の壁に貼りついていたのだ。床に隠した妨害電波のスイッチの傍にジッと立って、ミーネが近づくのを見まかすかきと待ち受けていたのだ。

「私を生かしたまま捕まえようとした欲が、アタになったな」

「く……そお……ッ!」

歯噛みしたミーネの首筋に、ツツと刺さる小さな痛み。

冷たい痺れがうなじに広がり――次の瞬間、意識がブラックアウトした。

どれくらい経ったのか――。

「ん……うう？ あつ!」

気がつくともミーネは闇の中、椅子のような拘束具に捕らえられていた。

――いや、違う。

確かに椅子に腰掛けさせられてはいるが、背に回された腕や膝を広げられた脚を拘束しているのは、ミーネのパワードスーツだ。小柄な天才美少女に力と翼を与えていた魔法の鎧がハックされ、拘束具にされてしまったのだ。胴体部分は解放され、あろうことが



胸や股間の柔肌には微風すら感じる。肌にとりつき貼りに付いた倍力インナースーツが破かれ、発達途上の若々しい乳房や幼気な秘処が、剥き出しになっている。

恥辱を予感して歯噛みしたとき、頭上から強烈な光を浴びせられた。一瞬目が眩み――。

「おはよう、カシワギ博士」  
スピーカー越しのバルツェル博士の声が、狭い空間に反響した。

「くっ!! どこにいるのっ!!」  
「ここだよ」

声と同時に、3メートルほど離れた正面に明りが灯る。横長のガラス窓に隔てられた、おそらくモニタールームの中に、ニヤニヤとした博士の姿。

「そこそこの込んだプロテクトだったが、私に不可能はない。キミのAIも、キミ自身も、もはや私の玩具だ」  
「く……あつ!!」

歯噛みしたミーネの、ブリッと丸く小さな尻の下に、異変。座面が引き生まれた空間の奥から、いくつもの関節を持つ細いロボットアームが何本も競うように伸び出してくる。

「現在開発中の自動陵辱機械なのだが、ディーブラーニングに必須のデータがなかなか集められなくてね。少し協力してもらおうよ」

「勝手なことを……ッ!」  
リスのようにクリクリとした瞳に闇

志を燃やすミーネだが、その股間に迫る機械の腕は止められない。

そのうちのひとつの先端には、ビデオカメラ。冷たく光るレンズが、天才美少女の幼気な股間、マシユマロのうにやわやわとした乳白色の肉叡を、すぐ間近からジッと観察し始める。

「なんていやらしい……ッ!」  
歯噛みする間もあらばこそ、  
「うっ!!」

ミーネの尻穴にヌメッと、冷たく硬く細く、滑らかな感触が潜り込んできた。潤滑剤に濡れた金属製の細管が、いきなり肛門に挿し込まれたのだ。

「な……なにを……ンうっ!! く……ううう……ッ!!」

羞じけ余り裕すら与えられず、下腹に冷たい痛みが閃き始める。尻穴に差し込まれた細管から、ヒンヤリとした流腸液を注ぎ込まれたのだ。

「私が開発した、媚薬のように働くナノマシン薬だ。キミの胎内には化学薬品を分解・無効化するナノプラントが仕込まれているようだが、私の作ったこの薬は、それでは防げない。身体中の触覚神経に定着して快楽神経に作り替えるタイプだからな」  
「な……なんですってっ!!」

思わず叫び返しながらも、ミーネの中の冷静な部分がすなりと納得。  
ナノマシンとは、ウィルス工学によって生み出された微細な生体機械。胎内に定着し、細胞の再生を補助したり、各種ホルモンの生成などを行うものは、

薬のように使えるのでナノマシン薬とも呼ばれる。また、複数のナノマシンが協調して一連の複雑な化学反応を行うタイプは、工場になぞらえてナノプラントと呼ばれる。

ミーネの場合、胎内各所に仕込んだナノプラントのおかげで普通の薬は効かないが、神経細胞に定着して直接作用するナノマシン薬は防げない。注射されて気を失ったのがその証だ。

だから、全身の触覚神経も必ず、すべて快楽神経に作り替えられてしまう。

「安心したまえ。通常の麻薬と違って脳機能そのものに害はない。健康なまま性奴隷にすることができるとい、夢のような薬だ」  
「なにが夢よっ! そんなの、悪夢以外の何物でも……うっ!! あッ!!」

繊細な肛膜をしごきつつ、冷たく細い金属管が引き抜かれた。  
恥辱に震えて歯噛みしているうちに、下腹に閃いていた痛みが徐々に徐々に薄れ始めた。薬液が直腸粘膜から吸収され、体積が減ったのだ。

それはすなわち、いやらしいナノマシンが血流に乗り、全身に行き渡り始めたということ。身体中の触覚神経が恥ずかしい快楽神経になるのは、もはや時間の問題だ。

「さあ、これからが本番だぞ」  
「……っ!!」

ミーネの背後から細いロボットアームが伸び出し、剥き出しの胸へ回り込

んできた。先端には作業用の指がある。滑り止めとして被せられたゴムキャップには、小さなイボが生えている。狙うのはもちろん、淡い膨らみの先を彩る桃色乳首。

「や、や……あうっ!!」  
器用に動く小さな指に、胸先の肉豆を掴まれた。どういうプログラムになっているのか、キツく掴まれているのに辛うじて痛くはないという、絶妙な力加減。

精緻に組まれた油圧シリンダーとワイヤーが機械の指先を動かして、ミーネの可憐な乳首をクニックニツと揉み潰す。敏感な肉豆の側面に小さなゴムのイボを喰い込ませ、内部の快楽神経に心地よい感覚を次々と産みつける。

「んく……うっ!!」

「お? なかなか可愛い声だな。これは愉しめそうだ」  
スピーカー越しの嘲笑に、キツと眉を吊り上げるミーネ。

(こんなヤツに、いのように弄られるだなんて……ッ! どうにかして、反撃したい、けど……)

手足に力を込めてみるが、ハックされたパスワードはびくともしない。戦闘中にズレたりしないよう、ミーネの身体に合せてミリ単位で調整してあったものだから、引き抜くこともできない。ミーネのためにあつえられた専用拘束具のようなものだ。

この状態で可能な抵抗は、ただひとつ。博士を悦ばせないこと。できる限

好評発売中!

著者近刊

『淫妖蟲 凶〜凌辱病棟退魔録〜 森然蟲騷り』、『アリス 淫獄の姫騎士』、『学園戦姫 巴 淫辱の下剋上』、『魔戦姫 秘夜 淫辱の闘宴』、『凌辱レオタード〜淫獄に墮ちた女子高生〜』



り歯を喰い縛り、恥ずかしい声や淫らな表情を見せないこと——しかし。

「う……あつ?」

ふと見下ろした股間に、銀色の光。尖端に医療用のヘラを閃かせた数本の機械腕が、細く長く薄い金属の板の尖端をミーネのやわやわとした白い肉敵にそつと当てる。

「や、やめろ……やめろ、ああつ?」

——くばあ。

マシユマロのようにぶにぶにとした柔肉に冷たい圧力がかかり、乙女の秘処があられもなく展<sup>ひら</sup>翅<sup>は</sup>された。掻き分けられた肉敵の中、しつとり潤んだ鮮紅色の粘膜花弁が、間近に寄せられたビデオカメラのレンズに余すところなく撮影されてしまう。

『おお、綺麗なオマンコだ』

手元のモニターで映像を確認し、ニンマリと笑み崩れるバルツェル博士。

「歳のわりにピラピラは小さくて——ふむ、腔穴も小さいな。カシワギ博士は、どうやら処女らしい」

「だ……だから、なにっ?!! そんなこと、アナタには関係ないでしょッ!」

禿頭の小男の声に含まれる嘲笑の響きに、思わずさっさと返して言い返してしまふミーネ。

外見の美醜に価値などない、と割り切っているつもりで天才美少女も、内心では発達の遅い自分の身体を気にしているのだ。ちつとも膨らまない胸を気に病んで、毎日牛乳を飲んだり、自分の手で揉んでみたりと、秘かな努力

も続けていた。

心の奥底に隠していたはずのコンプレックスを、バルツェル博士に見抜かれてしまったらしい。

「私がキミを大人の女性にしてやろう。なに、礼は要らん。キミの可愛いよがり声や、淫悦に羞じらい悶えるその可憐な姿が、なによりの報酬だ」

ガラス窓の向こうでいやらしい笑みを深め、操作盤の上に二本の腕を忙しく走らせる。

「な、なにを……あつ?!! ちよ……ああダメ……ダメダメ、そこはあつ!」

背後から伸びて腰を回り込んだ新たなロボットアームが、ハの字に開いた白い太腿のつけ根、割れ目の縁に色づいた小さな小さな淫核を狙う。乳首を掴んでいるのと同じ小さく繊細な機械指が、快楽神経の塊を——。

「ダメ、ダメダメ……ああんっ?!!」

無防備なクリトリリスが軽く抓まれ、快感の稲光が閃いた。走り抜ける電流に背筋が反り返り、レンズに見つめられた秘裂の底で処女腔穴がキュウツと縮まる。

胸の肉豆も快感局点ではあるが、感じやすさは淫核のほうが何倍も上。

そんな肉芽を、機械の指がクニ、クニ、と絶妙な力加減で揉み潰し——もう一方の腕はイボイボゴムキャップに包まれた指先をクリトリリスの尖端にそつと押し当て、真珠のように輝く肉豆をきゅつきゅ、きゅつきゅ、と小刻みな動きで磨き始める。

「ひうつ?!! く、ンひうつ?!!」

機械の指に抓まれた左右の乳首と股間の淫核に、次々と刻み込まれる強烈な快感。ロボットアームが微かな作動音を立てるたびにミーネの細い身体が振れ、反り返り、スポットライトに照らされた白い裸体が噴き出す香汗に濡れてしつとりとした輝きを増す。肌の裏側に淫熱が行き渡り、振れ悶える全身が艶めかしい桜色に火照り始める。

「おかしいな、私のナノマシン媚薬はまだ効いていないはずだが……そんなに気持ちいいかね?」

「う……ッ?!! う、うるさいっ! 変なこと、言うなッ!」

ハッと我に返り、蕩けかけていた顔を懸命に引き締めるミーネ。だが、身体を自由を奪われている状態では、虚しい抵抗だ。

「処女のキミには信じられないこともかもしれないが、女の身体はもつともつと気持ちよくなれるのだよ」

博士の声が聞こえ、ミーネの背後でサーボモーターが作動し始めた。

「くっ?!! あ……ッ?!!」

背もたれがうしろに倒れ、代わりに腰が押し上げられる。脚を拘束した装甲服が外部から操作されてさらに左右に大きく開き——機械の指に割り開かれた幼気な秘処を、モニタールームの博士に見せびらかすような恰好に。

（ああ、なんてことを……ッ!）  
スポットライトの中心は、どうやらミーネの股間にあるようだ。明るく照

らされた己の秘裂がぬらぬらといやらしく輝いている様子を想像してしまい、恥辱に頬が赤くなる。

そして——。

「あ……ッ?!! ちよ……な、なにを考えているの、バカあつ!」

平らな胸の先、乳首を抓んだ機械指の向こうに、新たなロボットアームが何本も伸び出してきたのが見えた。

そのそれぞれの尖端には、淫具。

女性の穴に挿し込んで使う、棒状のいやらしい電動玩具。

明らかにペニスを象っているのもあれば、生物的な曲線で構成された異様な棒もある。太い鉤型や、いくつもの節に別れていたり、イボイボを生やしていたり、短い触手を何本も生やしているものもある。

「女性器というのは千差万別、合う玩具と合わない玩具があるのでな。どれが一番キミを気持ちよくできるか、ひとつひとつ試してやろう」

「や……やめて、ああ……んあつ?!!」

処女腔穴に迫る淫具に氣を取られていると、いきなり尻穴に硬く丸く滑らかな物体を押し当てられた。身体の影響は分らないが——ヴンッ!

ヴウヴウヴウヴンッ!

反射的に締まった肛門を襲う、力強く小刻みな振動。

ピンクローターと呼ばれる小さな楕円形の電動玩具によって、排泄孔の括約筋がマッサージされ始めた。



近未来  
科学技術は飛躍的な  
進歩を遂げていた

ねえ…人殺しには  
相應しい最期があるって  
思わない？

…だって  
犯罪者に生きている価値も  
意味もないんだから

ふふふ…  
もう終わりね  
ザルキ…

た頼む…待ってくれ  
話を聞いてくれ…

ま待て…俺は本当に  
誰も殺してなんか…

まあ別にどうでもいいのよ  
あんたはただ大人しく…

この私に殺されれば  
いいのよ!!

ひっ…たっ

助け…!!

サイボーグ化した己の身体で  
憎き女捜査官に復讐マシンレイプ!

**Endless  
Machine  
Ecstasy**

エンドレス  
マシン  
エクスタシー

本誌  
初登場!

漫画  
COMIC

ワス



絶対…  
絶対に…!!

ゆ許さねえ…  
あの女…



……!!

ほう…  
死に際にしては  
良い顔をしている



ふふ…この余韻が  
堪らないのよねえ…

やっぱり定期的に  
人は斬っとかないと



…誰だ…!?

奴に復讐  
したいか……?

どんな手段を  
使ってでも……



悪いけど私  
自分より優秀な  
人の命令しか聞く気  
はないのよ

待てレイファ…

レイファ…貴様  
スタンドブレイも  
いい加減にしろ…!

別に  
構わないでしょう?  
私一人でなんでも  
片がつくんだから

はあ? 合同捜査?  
悪いけど興味ないわ

数カ月後







があ…あつ

し…  
しまった…!!

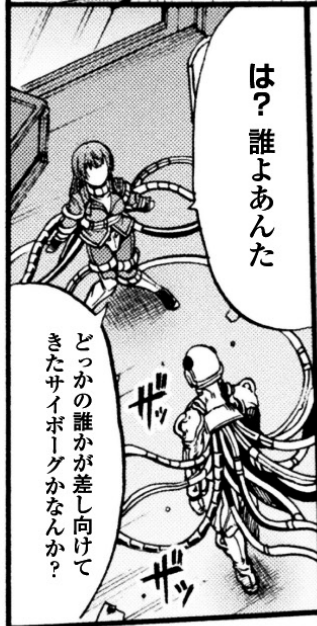


ふん…  
わらわらと…!

いいわ  
全部ぶった斬って…



がつ!!



は? 誰よあんた

どっかの誰かが差し向けて  
きたサイボーグかなんか?



あの時の恨み  
晴らさせてもらうぞ…

この日のために全身に  
仕込んだ代物だ…



俺の機械触手は  
どうだ…? 思いの外  
手強かっただろう

…!?



まあこの姿では  
分かるはずもないか…



俺はザルキ…てめえに  
殺人の冤罪をかけられて

…!!

無残に切り刻まれた  
男だよ…!!

…ふん…だから?それが  
なんだって言うのよ

悪いけど殺した奴の  
ことなんていちいち  
覚えちゃいないわよ

ふん…  
まあいい…

これから嫌というほど  
俺の存在を刻み込んで  
やるよ…

てめえの  
この体身になあつ!!

な何するのよ…  
み見るなあ!!

ククク…さあ始めるぞ  
俺の復讐を…!!

ぶるん

リアルドリーム文庫の大人気作が外伝小説として登場！

美しき母娘が機械の責めで悶え狂う！

囚われた人妻捜査官

祐美子

ゆみこ

外伝

母娘奴隷・黒い淫獄

単行本好評発売中！



●単行本のあらすじ

敏腕ぶりと美貌から衆目を集める捜査課長・羽村祐美子は、新型魔薬を追ううちにマフィア組織に囚われてしまう。娘と夫を人質に取られた凛々しき女捜査官は、魔薬の実験台として監禁肛虐を受けることに。さらには親の仇である黒人の殺し屋に孕まされたうえ、娘までも肉欲の虜にされてしまう！

ちくま じゅうこう  
小説 NOVEL 筑摩十幸  
挿絵 ILLUSTRATION asagiri



「ちゃんと売春してきたか？ 羽村楓」

「は……はい……」

金髪黒ギャル風の少女がオズオズと札束を差し出す。

名を羽村楓といい、捜査官である母親と共に中国系マフィアの金城に捕らえられ、新型魔薬エンジェルフォルによって、薬漬けにされてしまった哀れな少女だ。

元は学級委員をするほどのまじめで快活な少女だったが、魔薬によって墮落させられ、今ではクスリ代を稼ぐために売春を繰り返すビッチ女子校生と化していた。

「フヒヒ。私のために楓ちゃんみたいな美少女が身体を張って稼いでくれると思うと最高の気分ですな」

金城の横で嗤うのは中村。捜査官でありながら羽村母娘を罠に嵌めた卑劣な男であり、今は楓と結婚までしている。楓の稼いだお金の半分はこの男にピンハネされてしまうため、毎日十人もの男たちに身体を売らねばならないのだ。

「ああ、こんな事……本当はいやなの……」

普段はまともな思考ができるし、逃げ出したいと思うが、一旦クスリが切れるともうダメだった。どんなにイヤでも禁断症状には勝てず、蟻地獄にはまったように奴隷売春を続けるしかなかった。

「んん……数が足りないですよ、楓ちゃん」

「やん」

楓の袍をチェックしていた中村が訝しむ。ノルマは十人であったが、使用済みのコンドームは八個しかない。

「あ、あの……それは……補導員に見つかりそうになって……」

「夫に対して口答えするなんて、許しませんよ。援交好きなヤク中ビッチのくせに」

「きやあつ」

いきなりバシッと頬を打たれ、楓は悔し涙を浮かべる。いくら魔薬で狂わされていたとはいえ、こんな最低の男と結婚してしまった自分が惨めで、哀しくなる。

「うう……私……そんな女じゃ……ありません……」

「そんなエロい格好をしているくせに、まだ心までは黒ギャルビッチになりきれないようですねえ。これはもつとつと調教が必要ですよ。ヒヒヒ」

「あああ……」

残酷な笑みを浮かべる中村に見つめられ、楓は絶望の吐息を漏らした。

「ああ……こ、これ以上……私に何をやる気なんですか……」

ガラス張りのテーブルの上に仰向けに寝にされ、楓は狼狽える。真上には巨大な照明器があり、まるで手術台のようだった。

「まだ自分の立場がわかっていないようですからね。私がしっかりと教育してあげますよ。ヒヒヒ」

中村がテーブルの横のスイッチを入れた。ブウウッと起動音がして楓の真上にあるライトが強烈な青白い光を放ち始める。それは日焼け用の紫外線ライトであった。

「強力日焼けマシンですよ。通常の三倍の紫外線量ですからね、真つ黒に灼いてくれるでしょう」

ガラステーブル自体も発光して、上下両面焼きのグリルのように楓の身体を包み込む。身に着けているのは紐のような細いビキニだけで、乳房も秘所もぼろ丸見え、強力な日焼けライトから逃れるすべはない。

「うあ、ああ……ああ……熱い……うううん……やめて……」

「やめてと言いがら、エロイ顔になってますよ」

「そんなこと……あああんつ」

紫外線を浴びる楓の表情が恍惚を浮かべてクソッと反る。

日焼けにはある種の依存症があり、肌を黒く焼くことにハマってしまつて、抜けられなくなり、一日一回は肌を焼かないと気が済まなくなる。

楓はそこにさらに魔薬の禁断症状も重なって、日焼け中毒と言つていいほどの状態にされていたのだ。

「エロイ、いい色だ。ビッチ丸出しだな」

「もつと真つ黒になれるように、こんがり焼いてやるからな」

「うあ……や、やめて……これ以上……焼かないで……ああ……黒くしないで……はあん」

魔薬サンオイルでヌメヌメと輝く肌は小麦色を通り越して、ココア色。黒人のハーフかと見間違えるほどの黒さだ。

「はあはあ……だめえ……これ以上焼かれたら……ああ……学校に行けなくなっちゃう……みんなに嗤われちゃう……ああん」

魔薬成分が肌から吸収され、X字に固定された身体をクネクネとくねらせる楓。汗とオイルで輝く褐色肌の上で、「bit ch」や「sex」といった卑猥なタトゥーが踊り、見る者を興奮させる。

「日焼けで感じるとは、さすがビッチな援交少女ですな」

幼妻の反応に満足そうに嗤う中村。清純な楓を黒ギャルに変えてしまったのも彼の趣味であった。

「あの真面目な女子校生が魔薬漬けですっかり俺好みの黒ギャルビッチに……たまりませんなあ。ヒヒヒ」

日焼けマシンの上の金髪褐色少女を見ながらニヤニヤと嗤う。

脱色と染色を繰り返したツインテールは完全なブラチナブロード。耳や舌、乳首やお臍に嵌めたピアスと共に、マシンの光を浴びてキラキラと眩しく輝

いている。

長く伸ばした爪には派手なデコレーションが施され、卑猥な穴あきビキニブラジャーを盛り上げている乳房もシリコン注入による豊胸手術でGカップの爆乳と化していた。

「どんどん黒くなつていくねえ。一生消えないくらい、真つ黒にしてあげるからねえ」

「はあはあ、いやあ……元に戻れなくなつちゃう……はあ……これ以上焼かないでえ……真つ黒のいやらしいピッチになっちゃう……あああん」

イヤイヤと首を横に振るものの、楓の肉体は快楽に流され始めている。

楓が通うH学園は真面目な進学校だ。金髪ガングロの楓は既に周囲から浮いており、日々冷たい視線と様々な陰口を浴びせられて針のむしろ状態なのだ。退学にならないのは捜査官の母のおかげだが、それもいつまで持つか怪しいモノだ。

「感じてくせに素直じゃないですなあ。乳首はピンピン、オマンコもグッチョリ濡れてますよ。ヒヒヒ」

「ああ……」

中村の言うとおり、ピアスされた乳首はツンと尖り、まだ触れられていない蜜肉も、濃厚な愛液をジクジクと湧かせ始めていた。

「ヒヒヒ。じゃあ楓ちゃん、今度は身体の内側からも黒ギヤルにしてあげるよ」

「ああ……これ以上はやめてえ……あ

うううっ」

助手の男たちが楓の乳首とクリトリに点滴の針を刺すが、魔薬オイルでトリップ状態の楓にとつては、甘噛みの愛撫でしかない。

「これはメラニン色素でね、乳首とクリちゃんを真つ黒にしてあげるよ。ヒヒヒ。嬉しいでしょ？」

「あああ……うれしくない……はあ、はあ……そんなにされたら……もう……誰にも見せられないよ」

年頃の少女にとつて、親にもらった大切な身体を取り返しがつかなくなるほど穢されていくのは相当な精神的ダメージだ。

「尻の青いガキ共は気持ち悪がつて近づかないでしようねえ。浮気防止もできて一石二鳥なわけですよ」

「ああ……ひどい……うう……もうやめて……ああ……ゆるして」

屈辱に涙ぐむ楓。最早自分は愛する人と恋をして、結婚するという、ごく普通の幸せすらも手に入れることはできないのだ。

「もう私と結婚しているんだから、泣くことなんてないでしょう」

「あうう……」

焼けた頬を大粒の涙が流れ落ちていく。その間にも色素を沈着される乳首とクリトリスは黒ずみ、チョコレート色に染まっていくな。

紫外線ライトで焼かれる肌から夥しい汗が噴き出し、ローションと混ざり合つてさらにヌメヌメと照り輝き始め

る。まるで生きた黒檀の彫刻のような美しさだ。

「そしてオマンコにはこれじゃ」

金城が別のスイッチを操作すると、楓の脚の間に極太の張り形がヌツと突き出した。

太い幹からは無数の突起が突き出し、しかもそれら一つ一つが紫外線を発光しているではないか。

「これでオマンコは奥の奥まで真つ黒のドドメ色になるのじゃ。ヒヒヒ、淫売のお前に相応しい身体になるのじゃ。嬉しいからう」

「うああ……そんなところで……それだけはやめてえ」

女の一番大切なところまで黒く染められてしまう。あまりの絶望感に目眩すら覚えた。

しかし助手たちが陰唇のピアスをクリップで挟んで左右に捻げると、濡れた媚肉の合間から濃厚な愛液がトロリと溢れ出てきた。

「感じてるぜ、エロガキめ」

「やつぱり黒ギヤルピッチになりたいんじやないか」

「ああ……」

ガラガラと嘲笑を浴びせられても反論できない。身を焼く羞恥とライトの光が楓の理性を狂わせる。もつと淫らに、ふしだらになった自分を想像するだけで、倒錯した愉悦がこみ上げてくるのだ。

「ほおれ、入るぞ」

スイッチを入れると青白い光をまと

った淫具が前進し、ゆつくりと楓の中に侵入してくる。

ズブツ、ジュブツ……ズブズブツ……グチュンツ！

「あ、ああ……うう……っ！ ああ、なにこれ……あ、熱い……うああん……ヤケドしちゃう……抜いて……はあ……抜いてえ」

発光パイプは熱を孕んでおり、楓は動転の悲鳴を上げた。まるで焼けた松明を突っ込まれたような灼熱に襲われたのだ。

「心配せんでもヤケドはせん。魔薬で敏感になつておるだけじゃからな」

「う、うぐぐ……」

説明されてもその身に感じる熱さは変わりはない。イヤイヤと脂汗を滲ませた美貌を左右に振る。

「その熱さも快感に変わるのじゃ」

金城がさらに別のスイッチを入れる

と、ブウウンツと音がして発光パイプレーターが振動を開始した。

「あああつ！ だ、だめえっ！ あひいっ！」

野太い淫具は蛇のように頭を振りながら回転し、さらに小刻みに振動する



子宮に塗り込まれる。

「あああああつ！ クスリがあ……ああ……ら、めえつ！」

ギクンと背筋が硬直し、ブリッジを描いて腰が浮き上がる。

全身の肌に塗られた魔薬ローション、照りつける日焼けマシンの光、膣奥を炙る魔薬と発光パイプ。

身体の外側と内側から同時に責められて、楓はだんだんワケがわからなくなってきた。

「もつと狂うがよい」

プウイイイ~~~~ンッ！ プウイイ~~~~ンッ！

「あ、あ……ああ……らめえ……ンああああ……お、お母様……助けて……ああ……」

パイプの閃光が媚肉を強烈に照らし、振動が一段と強く子宮を揺る。魂までとろかす日焼けと魔薬の快美の渦に呑み込まれ、手足がビクビクと痙攣する。瞳は焦点を失い、口の端からは涎まで垂れ流している。

「プフフ、助けになど来るものか。お前の母親は、ボブとの間にできた子供に夢中じゃ。お前のことなど頭から消えておるわい」

金城の指示でヘッドマウントディスプレイが楓の頭部に装着された。

「母親を取り戻す方法を教えてやろう」

「あ、ああ……お母様……」

涙にぼやける視界には、母の羽村祐美子の淫らな姿が映し出される……

「あ、あ……も、もう……外して……ああ……これ以上搾らないで……あああああつ！」

頑丈な鉄棒に固定された汗まみれの熟れた裸体を戦慄かせ、祐美子は牝の鳴き声を放った。

「ひつ、ひいんっ！ だめ……また……ああ……イクッ！ 祐美子、イっちゃううっ！」

絶頂の咆哮と共に背筋を反らせ、跳ね上がるGカップ超の双乳から白い母乳が噴き上がった。

プシャアアアアッ！ ジュルルルルウ~~~~ンッ！

「ひつ、ひいんっ！」

母乳はすぐさま乳頭に装着されたガラスの筒に吸い込まれていく。それは家畜などに使う搾乳器であった。

「乳搾りだけでイったか、牝メ」

背後に立つ黒人の男がニヤニヤ嗤いながら祐美子の全身を舐めるようにに見回す。

羽村祐美子三十五歳。敏腕捜査課長として魔薬組織の撲滅を目指していたが、家族もろともにマフィアに捕らえられ、壮絶な魔薬調教実験にかけられてしまった。

初めは抵抗したモノの、新型魔薬によつて親の仇でもあった殺し屋ボブへの愛情を刷り込まれ、彼の子供を妊娠出産させられたことで陥落、今では奴隷妻として絶対服従している。

「気持ちいいだろう。魔薬でユミコの全身は性感帯だからナ、グフフ」

「ハアハア……ボブ様……もう、お許しを……ハアハア……」

両手を頭上に吊られ、お尻を後方に突き出した格好で祐美子は懇願する。

出産経験がある熟れた女体は過酷な責めの中でも美しさを失わない。むしろ惨く責められれば責められるほど色気と輝きを増していく。あたかもダイヤモンドの原石が研磨されていくかのように、肌は透き通るように白くなり、くびれ腰からお尻が描き出すラインも、芸術的だった。

ボブの子を妊娠出産させられてから乳房はさらに一回り大きくなり、魔薬の影響か、母乳も一日におよそ二リットルも分泌されるようになっていた。

腋の下には黒い腋毛がうっそうと茂り、濃厚な汗とフェロモンの匂いをムンムンと放っている。

その完熟状態の女体を飾るのが残酷にして艶やかな刺青だ。お尻には牡丹の花びらが、そして下腹には雲海をまとった青い龍が生き生きと描かれている。それは彼女を拉致し墮落させたマフィア、青龍会の所有物になったことを示していた。

「ハアハア……もう……こ、これ以上は……出ません……ああ」

昨夜からずっと機械搾乳責めに掛けられ、二リットルの容器がいっぱいになるほどの母乳を搾り取られていた。

母乳を搾られるたびに乳首は敏感になっけい、今ではクリトリスにも匹敵する性感ポイントと化しており、吸

引されるだけで凄まじい快感が乳腺いっぱいには拡がって祐美子を悶絶させた。

「俺たちの子供のためダ。もつとミルクを出せるように、発情させてやル」

プウイインッ！ プイイ~~~~ンッ！

乳首に取り付けられていたローターが振動し、強烈な快楽を送り込んでく

「はひいっ！ そんなあ……お乳が、ビリビリして……ああああ……お、おほおっ！」

二つの尖りきった肉芽が快楽火花を放つ。ギクンと腰が反り、乱れた黒髪が汗の滴をまき散らす。

吸引責めで完全勃起状態の乳首にはたまらない刺激だ。あつという間にエクスタシーの残り火が燃え上がり、真つ赤な炎の柱を立ち上がらせた。

「ンあああ……こ、壊れちゃう……ら、らめえつ！ あああおおっ！」

高圧電流を浴びせられたように、半狂乱になって拘束された身体を足掻かせる祐美子。しかし頑丈な金属フレームはびくとせず、ひたすら腰を振って哀れな空中ダンスを舞うばかりだ。

「トドメダ」

ボブがボタンを押すと、乳房を上下から挟んでいたローラーが回転し、根元から先端に向かってギユウギユウと搾り上げてきた。

…イクウツ……ああ……イクイククッ！ イッグう~~~~ッ」

まるで家畜のように吠えながら、搾乳器のガラス筒の中に大量の白濁母乳を進らせる祐美子。膣孔からも愛液の滴をまき散らし、張り形を食いちぎらんばかりに締め付けた。

「はあ……はあ……もう……ゆるしてください……ポブ様……はあ……」

「だいぶ溜まったな。次の段階に進むゾ」

ポブが搾乳ポンプからつながる黒いゴムチューブを祐美子のアヌスにあてがう。そしてそのチューブの先端を肛門用のパイプに接続した。

「イクゾ」

「何を……はひいつ!」

異様な感覚に祐美子は短い悲鳴を上げた。搾乳器のポンプが作動し、タンクに溜まった搾りたての母乳を祐美子のアヌスに送り込んできたではないか。「グフフ、ユミコはミルクタンクになるのダ」

「あ、ああ……そんなあ……お乳が……ああ……お、お尻の中に……うああ……入ってくる……はああんっ!」

自分の母乳を浣腸されるといふ異常な責めに祐美子は混乱して、陶器のように白い尻を振り立てる。赤ちゃんと飲ませる母乳までも、淫らな責めに使われるとは。

「あ、ああ……入れないで……いや

あ……こんなこととしてはあ……だめなの……感じちゃうう……あああむっ!」

尻タブがえくぼを刻んで強張り、括約筋を必死に締め付ける。だが張り形はびくともせず、母乳の注入を止めることはできない。

（ああ……頭が……おかしくなっちゃううっ）

ドクドクツと流れ込んでくる温かな母乳が、祐美子の母性を狂わせる。魔薬調教によって、祐美子のアヌスは膣孔をも上回る快楽の壺と化していたのだ。肛門を中心に熱い快楽が波紋のように広がっていき、全身の神経を痺れさせた。

「ビツ、ビツ、アヒイッ! イクツイクウツ!」

白目を剥いて仰け反り、あつという間にアナルアクメに登り詰めてしまう祐美子。肛門での絶頂感も持続し、被虐の連続アクメからいつまでも降りられなくなる。

「浣腸だけで気をやったぞ」

「真性のアナルマゾだな。あの羽村祐美子が堕ちたもんだぜ」

敏感な祐美子の身体に驚いたり関心しながら、男たちは食い入るように祐美子の肛門を見つめていく。

その間にも機械は無慈悲に作動を続け、強制搾乳ローラーが乳房を押し潰し、ローターパイプが乳首を甘噛みする。乳肉は杵でつかれる餅のように変形し、当然苦痛もあるのだが、魔薬調

教された肉体は、それも快感へ変えてしまう。

「ああ……お乳が壊れちゃう……イクウツ! はあ……もうやめて……搾らないで……浣腸しないでえ……ああ……イク、イクイクウツ!」

「ピュッ! ピュルルッ! プシャアアッ!」

身体中の性感帯を同時に刺激されて、祐美子は官能地獄にのたうち回りながら、何度でも何度も射乳を繰り返した。普通の女ならとくに失神しているだろうが、快感が大きすぎてそれも許されない。

「へへへ、もうイクっぱなしじゃないか。敏感な乳と尻だぜ」

「すげえ、このまま百回くらい連続で気をやるんじゃないか」

助手たちがゲラゲラと嗤う。全員が勃起しており、中には我慢できずにセンズリする者もいた。

（ああ……くるつちゃう……）

連続絶頂で自我が溶かされ身体もドロドロに溶けていく。

休むことを知らない機械の牢獄に捕らえられ、ひたすら搾乳と浣腸による絶頂を繰り返させられるうち、最早自分はこのおぞましいセックスマシンの一部にされてしまったような気がしてきた。

それでも注入された母乳が一リットルを超えると、便意と苦痛が快楽を上回ってくる。母乳の勢いもかなり落ちてきた。

「はあ、はあ……もうゆるしてえ……ああうう……お乳、壊れちゃう……お、お腹が……くるしい……あああッ」

タンクの残量はおよそ半分。搾乳されながらの浣腸なので、祐美子の肛門は1500cc近い母乳を飲み込んだことになる。

お腹は丸々と膨らんで、まるで妊婦のようだ。そのポテ腹に彫られた青龍の刺青が、汗だくの雪肌の上で妖しくとぐろを巻いて、生きて動いているように見える。あたかも祐美子の中の秘められた淫欲を象徴するかのよう。

「だめダ。全部浣腸するまで許さない。それにユミコの身体は悦んでイル。もつと俺にミルクを搾られたい、もつと激しく浣腸で責めてくれとおねだりしているゾ」

「そ、そんなこと……ああ……」

ポブが膣孔に黒い指を埋めて押し広げると、クチャアッと淫靡な粘着音が鳴り響き、濃厚な本気汁がドロドロと溢れ出してきた。

「グフフ、身体は正直。プッシーが涎でグチョグチョネ、俺を愛している証拠ダ」

「うあうう……はあ、はあ……それは……ああ……」

ハッキリ否定できず、祐美子は弱々しく首を横に振る。ポブに惨く責められるほどに、肉が燃え、子宮は淫らな蜜にまみれていく。一年にも及ぶ調教で、そういう風に馴致されてしまったのだ。



はっ早く  
奉仕してくれよ

じゃないと  
俺たちみんな  
死にまうん  
だぜえ？

はあ…  
はあ…

わかってる  
わよ…

んはあ

聖女を犯す  
滾りが止まらない！

あっ

もう我慢  
できねえ  
いいよな使わせて  
もらうぜ

や…  
ちよっと  
待つ…

# 粘獄のリーゼ

淫罪の宿命 第3話 もうひとりの術者

漫画 楠木りん 原作 竜胆

おおっ！  
シスター様の中  
すげえ  
気持ちイイ！！

ビーン  
ゼン

んん…  
うぐっ

ふぐ…  
奥までくる…！！

はあー  
この締め付け  
たまんねえ

このペニス  
大きく…って

まったく  
こんなエロい体で  
よくシスター  
やってるよな

くっく…！  
勝手な事  
言ってる…！！





俺は後ろを  
使わせて  
もらおうかな

俺のチンコも  
あんなの中で  
イカせて  
くれるよな

後ろ…って!?  
何考えてるの!?

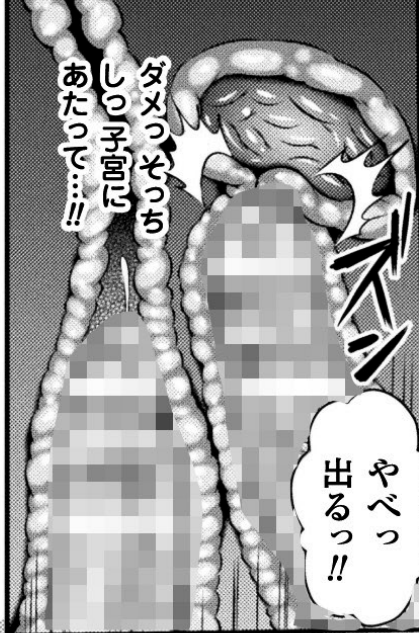
やっ…  
無理よ!!

やめっ…  
そんなトコ  
入れないでえ!!

ひやは!  
入ったぜシスター様の  
ケツマンコ!!

お尻にまで  
入れられる  
なんてえ…!!

はぁぁぁ



ダメっぞうち  
しつ子宮に  
あたって!!!

やべっ  
出るっ!!

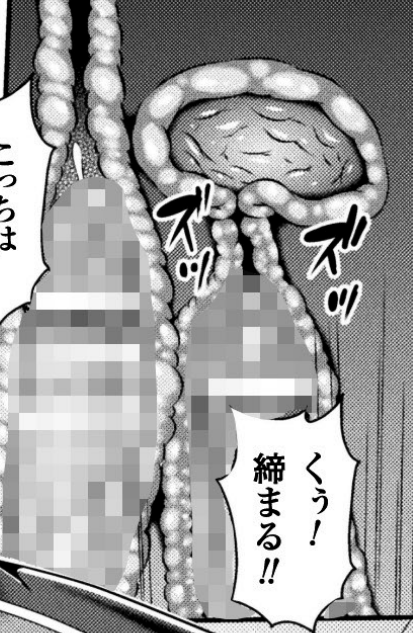


いやあ  
お尻  
めくれちゃうっ!

こっちは  
処女だった  
のかい!?

あっ

あっ



くう!  
締まる!!



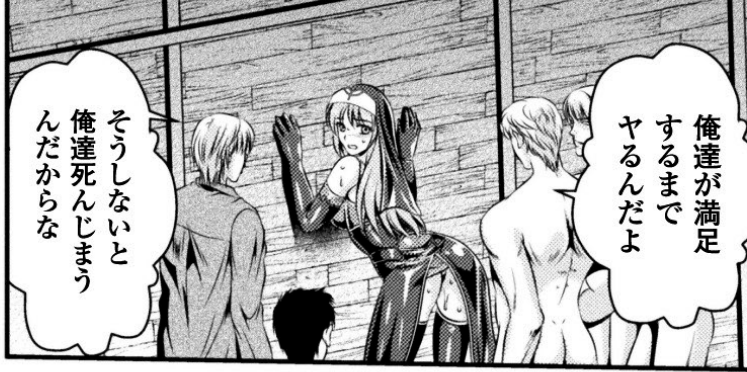
うう!  
シスター様の  
マンコに  
中出し!!

あっああっ!!

また:  
膣内にいっぱい!!

生オナホ  
たまねー!





そうしないと  
俺達死んじゃう  
んだからな

俺達が満足  
するまで  
やるんだよ



げへへ  
次は俺だぜ  
シスター様

ま...まだ  
するの...!?



覚悟は  
していた  
けど...

こんな  
次々と...

くっ...



おらっ俺のは  
デカいぜえ!!

ひゃああっ!!



アンドロイドに教え込まれる性感！  
機械に拘束され抗えないまま絶頂に！！

Rape Android

# 凌辱アンドロイド

女スパイ調教遊戯

小説  
NOVEL

あらおし悠

挿絵  
ILLUSTRATION

恋河ミノル



会見場は二百社以上の記者やカメラマンで埋め尽くされていた。眩いフラッシュが照らし出すのは、まるで双子のようにそっくりな、同じ白衣を着た二人の女性。

そのうちの立っている方が、若き天才としてロボット工学界に名を馳せている、天満彩加教授だ。

「えー、お集まりの皆さん。本日お見せするのは、わたしが新たに開発した最新アンドロイドです」

天満教授は、鼻からずり落ちる丸眼鏡を何度も掛け直しながら、隣に座るロボットの頭を撫でた

「独自にサンプリングした表情データを元に、人工皮膚の下に通した数百の極細ワイヤーを微細にコントロールすることで、表情筋の動きをより自然に……まあ見てもらった方が早いね」

気だるげな口調の割に、一気に捲し立てていた彼女が、急に説明を打ち切った。記者たちの「能書きはいいから動いているところを見せろ」という空気を讀んだ、というわけではなく、単に面倒くさくなっただけのようにだ。気分にはある性格らしい。

彼女がテーブルに置かれたパソコンを操作する。すると、それまで身じろぎもしなかった人形が、小首を傾げてニッコリと微笑んだ。

「皆さん、今日は。私は、天満教授をモデルに作られた、タイプS2です」会場が「おー」とどよめく。これまでも人間そっくりのアンドロイドは作

られてきたけれど、このリアルさは段違い。コンピュータで合成された音声にも不自然さはない。この手の分野の専門である科学雑誌の記者さえも、驚嘆の表情を隠せないほど。

しかし、盛り上がる記者団とは正反對に、天満教授の表情は冴えない。退屈そうで、欠伸を隠そうともしない。

（やっぱ、睨んだ通りね）加熱する記者たちに紛れ、ローズはその碧い瞳を光らせた。主役のアンドロイドには一切興味を示さず、教授の一挙手一投足を注視する。

（私の眼はごまかせないわよ、教授）

ローズは、S国の軍に所属する情報部員。スパイだ。名前は、もちろんコードネーム。金髪碧眼、小山のような巨乳に締まった腰のグラマーな体型という華やかな外見から名付けられた。主な任務は、この容姿を活かし、政財界の有力者を色仕掛けで誘惑して情報を聞き出す諜報活動。だが今回の指令は、いつもとは少しばかり違う。

新型アンドロイド完成の記者会見から数日後、ローズは雑誌の取材を装って天満教授の研究室を訪ねていた。

自慢の金髪をポニーテールに結い、フレームの太い眼鏡をかけ、白ブラウスに紺のタイトスカートという、可能な限り色気を控えた野暮ったい服装。こんな地味な格好で任務に当たることなんて滅多にない。

目的は教授をS国に招くこと。もち

ろん晩餐への招待ではなく、ヘッドハンティング。軍の技術部門が、彼女の優秀な頭脳を欲しがっているらしい。「教授がこちらの要求に乗ってくれる人物であればいいんだけど」

天満教授の研究室は、広い敷地を持つ工科大学の一番端、小さいながらも三階建ての校舎を丸ごとあてがわれていた。最初は、さすがは高名な学者だけあって優遇されていると思っただけだ、その認識は誤りだったようだ。

建物、相当に古い。壁や床はあちこちで剥がれ、蛍光灯も切れたり点滅したりで、メンテナン스가行き届いていない。廃墟一步手前といった感じ。

「彼女、この大学の広告塔じゃなかったの？」

おそらく、学内では厄介者扱いされているんだろう。優秀な学者への嫉妬か、あるいは本当に変な人なのか。

「うーん……冷遇されている方なら、交渉がやりやすいんだけどな」

S国の軍事研究所なら、施設面でも資金面でも、ここよりずっと待遇がいい。少なくとも電灯の交換に困るなんて事態にはならない。もし変わり物の研究馬鹿だったとしても、よりよい環境の提示に悪い気はしないはず。

場合によっては手荒な手段も許可されているけれど、それはローズの流儀じゃない。数々の男を手玉に取ってきた手練手管は、同性相手にも通用するという自信があった。

「とはいえ油断は禁物。まずは彼女の

人となりをよく観察して……。それにしても遅いわね」

応接室に通されて、二時間は経つ。用途不明の機械装置が雑然と並ぶ中にソファを置いただけの元教室を応接室と呼ぶのかは別に、男相手の時はこんな待たされたことはない。

「客にコーヒーも出さないなんて」もちろんローズも優秀な諜報部員なので、時間を無駄にしたりはしない。化粧を直すふりをしてコンパクト型のカメラで室内を撮影したり、トイレを探すついでに、眼鏡に仕込まれたビデオで通路を撮影したり。

しかし、そんな人目を忍ぶでの情報収集も、時間があまりすぎて逆にすることがなくなってきた。

「もうちょっと奥まで探ろうかしら」今日は様子見のつもりだったので雑誌記者を装ったけど、失敗だったかもしれない。この格好で施設内を無闇に歩き回るのは怪しまれる。

「まだ、肝心の研究室の場所も掴んでないし……」

教授本人に案内してもらおうの一番自然な形なのだけど、もちろん見せてもらえなかった場合も想定してある。

「まったく、予定が狂いまくり。今までの男どもは、私が呼べばなにを差し置いて飛んで来たっていうのに」美人スパイとして、こんなにブライドが傷ついたのは初めてだ。ブツブツと文句を言いながら、捜索に出ようと

してドアを開ける。

「——!!」

一瞬、息を呑んだ。暗い廊下を背景に、不気味な白い人影が立っている。不意の遭遇にも驚かないように訓練されているので、迂闊に悲鳴を上げたりはしない。スッと半歩距離を取り、反身に構えた。しかし警戒するローズを意に介することもなく、その影は音もなく部屋に滑り込んできた。

「お茶をお持ちしました」

それは、黒髪を綺麗に肩で切り揃えた長身の女性だった。優雅な仕種で茶碗をテーブルに置き、お盆を持ったままソファの傍らに立つ。どうやら教授の助手のようだ。

今頃になって客の応対というのも気が利かないけれど、それよりローズを困惑させたのは、彼女の服装。

（これって……ナース服、よね？）

誰に問いかけるわけでもないのに、疑問形になってしまう。

裾の短い看護服は、ローズも以前の任務で着せられたことがある。あれはコスプレ好きの経済界の大物に接触した時だったか。仕事から変装はよくあるけれど、あの中年男性の変態じみた笑みのせいで、他の人がこんな格好をしているのを見るだけでも気分を害すようになってしまった。

（確かにこれも白衣には違いないけど……日本人ってコスプレ好きよね）

ロボットの研究室には、いささかミスマッチ。これをどう解釈すればいい

のか困って立ち尽くしていると、ナース服の女が首を傾げた。

「お茶をお持ちしました」

「あ……ああ、どうも……」

変な人や事態には慣れているつもりなのに、どうにも調子が狂う。

「どうもお待たせー」

「きやあ!？」

ソファに座り直そうとしたら、いきなり背後から声をかけられ、今度は悲鳴を上げてしまった。演技でもないのにこんな声を出すなんて初めてだ。

「天満教授!? あ、今日は……」

「インタビュでしよ。おたくらの雑誌にはお世話になってるからね、優先的に答えてあげるよー」

その科学雑誌に教授が何度も取り上げられているから、今回、勝手に名前を使わせてもらったのだ。うまく信じ込ませることができたと内心でほくそ笑んでいると、彼女がどかっとソファに腰を下ろした。そして細い手足を組んでふんぞり返る。

ローズも再びソファに座る。偽の取材を始めようとして、しかしひとつ、気になって仕方がないことがあった。

「……………あの、彼女は」

さっきのナース服が、教授の隣に直立姿勢で控えている。背の高い美人が微動だにせずこちらを見据え、なかなか監視されているようでやりづらい。

「ああ、この娘はわたしの助手」

それくらいの見当はつく。とはいえ事前に目を通した資料には、この人物

に関する記述はなかった。

「その……どうしてナース服を？」

「同じ白衣を着せるなら、可愛い方がいいからね」

こいつもコスプレ趣味の変態オヤジと同類か。ローズは引き攣るこめかみを、作り笑顔で必死に隠した。

（まったく、日本人はなんでも可愛いで済ませようとする）

この助手が無表情なのは、きつとパワハラに耐えているからに違いない。上司に恵まれない彼女への同情と、教授に対する軽い失望を感じながら、ローズは、メモ用のペンに仕込まれた録音機器のスイッチを入れた。

「そういえば、いつもの記者さんと違うんだね」

天満教授が首を傾げた。その質問も想定済み。

「私は最近配属された新人で、先生の偉大さに触れてこいと言われました」

「それは結構。存分に触れなさい」

小柄で童顔な容姿に似合わない、尊大な態度。自分の才能によほどの自信があるのだろう。それも当然といえば当然。十代で博士号を取り、二十歳前で教授に就いた天才だ。自信を持った方がいい方がどうかしている。

（とはいえ情報以上の傲慢さね。それだけに、扱いやすいかも）

こういったタイプは、プライドをくすぐれば意外と簡単にこちらの目論見に乗る。この任務は、思ったよりも簡単に終わるかもしれない。

「それで？ 聞きたいのはこの前のアンドロイドについて？」

「はい。先日のお見を拝見し……」

「あれだけ自然な表情を出せるロボットは他にないと自負するわね。反面そこに特化したもんだから、他の部分の完成度が低いのが難点かしら。特に歩行機能はこれからの課題ね。本物の人間のように動かすのは、さすがのわたしももう少しかかりそう」

質問する前から勝手に喋り出した。でも、お調子者のように見えて意外と抜け目がないようだ。ローズは彼女に対する認識を変えた。これだけ口が滑らかなのに、S国が掴んでいる情報には、なにひとつ言及していない。

（これは、下手に小細工するより本題に入ってしまった方がいいかも）

まだなにか喋り続けている彼女を遮り、核心に触れた。

「教授。私たちは、あなたがもつと高性能のアンドロイドを開発済みという情報を得ています」

途端、自慢話の口が止まった。彼女の眼鏡の奥で細くなる瞳を確認しながら、ローズは続けた。

「先日の、ただ笑うだけのものではなく、人間以上の動きをするアンドロイドが存在する。事実でしょうか」

「どこでそんな話を？」

「情報源は秘密です。確かな筋からとだけ言っておきましょう」

実のところ、今回の任務は天満教授を手に入れたという軍上層部からの



依頼が発端で、ローズが所属する情報部すら詳しい話は聞かされていない。ただ、ロボット兵計画が頓挫しかけていたので、めばしい人材を欲しているのは間違いない。しかし、そんな内情など任務には無関係。ローズはただ、彼女を本国に連れて帰るだけ。

「教授、もし他の国や研究機関があなたをスカウトしてきたら、応じる考えはありますか？」

「んー、ないかなあ。ここは、わたしにとつて最高の環境なのよ」

「申し上げにくいのですが……この古びた施設が、あなたの頭脳に見合っているとは到底思えません。例えば、国の全面的な支援を得られれば、もつと自由に研究できるはずですよ」

「お金の問題？ そこはあんまり関係ないかな。それより、わたしに重要なものは自由なのよ。このいい感じに放置されている感じがいいの」

ローズは理解できなかった。ロボット開発に関してはまったくの素人だけど、天井知らずに資金が必要なくくらしいは想像できる。彼女は、それを問題ではないと言いきった。

（パトロンがいるってこと？）

もしかすると、既に他国と接触があり、スポンサーとして資金援助も受けているのかもしれない。

（急いだ方がいいかもしれないわね）

その日の夜、ローズは再び大学構内に忍び込んだ。昼間の格好とはがらりと変わった、侵入用の装備で。

身体ラインを露わにしながら、防刃性に優れた特殊繊維のスーツ。数々の小道具を仕込んだベスト。全身黒ずくめの中、下ろした金髪だけが闇夜にたなびく。音もなく廊下を駆け抜け、目標の部屋の前にとどまり着いた。

教授が他国と接触している可能性を本国に伝えたと、即座に我が国までお連れしるうとお達し。

「やれやれ、援軍もなしに……。人使いの荒いこと」

平たく言えば拉致だ。こういう荒事は好みじゃない。とはいえ、命令とあれば速やかに遂行するのみ。

侵入経路や建物の構造は、昼間のうちに確認してある。ターゲットがここに隔離状態なのも好都合。しかも、時刻はそろそろ日付が変わる頃なのに、校舎内にはなにかの工作機械の音が響き渡り、一向に帰宅する気配がない。

助手の存在は想定外だったけど、任務にアシデントはつきもの。色仕掛けが専門のローズとはいえ、研究室に入り浸りの引き籠り女ひとりりを確保するくらい、造作もない。

「それにしても暗いわね」

廊下の明かりが消えている。日中は曲がりなりにも蛍光灯が点いていたのに、経費の節約だろうか。空は雲が厚く、月明かりも期待できない。暗視ゴーグルを装着し、静寂の中を進む。

「確か、教授は四階の端……つと！」

突然、進行方向のドアが開いた。慌

てて柱の陰に身を隠す。出て来たのは小柄な白衣姿の女性。教授だ。

（んふふっ、お手洗いかしら）

白衣のポケットに手をつ突っ込んで、呑気な足取りでこちらに歩いてくる。ローズはベストから小型の催眠ガスのボンベを取り出し、距離を測った。

（……………今だ！）

音もなく飛び出し、教授の顔の前にボンベを突き出す。しかしガスを噴出させる前に手首に重い衝撃が走り、堪らず缶を落としてしまった。

「なッ……なに!？」

反射的に2メートルも飛びのき、ゴーグルの奥で目を見開いた。あのナース服助手が、手刀を構えて教授を守るように立ち塞がっている。

「馬鹿な……どこから出て来たの!？」

信じられない。直前まで、助手の姿なんて気配すらなかった。しかも、その細腕でローズの手首を打ち据えたというのだろうか。

「教授を助けに来たの？ 忠実なワンコね。それともネコちゃんかしら」

軽口を叩いてはいるけど、実際はまったく余裕がなかった。まだ腕が痺れている。いくら体術が得意でないとはいえ、学者ごときに遅れを取るような鍛え方はしていない。愕然としているローズに、ナース服の向こうから天満教授が手を振った。

「ようこそ記者さん。でも、こんな夜中に訪問するなら、アボくらい取って欲しかったなあ」

緊張感のない声が、逆にローズを戦慄させた。彼女は、こちらが潜入することを知って、待ち受けていた。

「でもあなた、演技が下手ね。普通の記者じゃないってことは、身のこなしで一目瞭然だったわよ。おおかた、わたしをスカウトしに来たスパイでしょうけど、協力する気はないから」

「そっちになくても関係ない。絶対に連れて帰らせてもらうわ！」

素人に見破られた動揺を抑え、予備動作もなくナース服助手に飛びかかった。彼女は脅威だ。一瞬でも早く排除する必要がある。ローズは肩からの体当たりで、壁に突き飛ばした。

その勢いを殺さず教授に向かって直進、奪取——のはずだった。

「な……なんですって!？」

しかし、またも驚愕する羽目になった。助手が、壁にぶつかる直前で跳ね返ってきたのだ。まるで見えないクッションにでも当たったように。今度は彼女がローズにパンチ。それを交差させた腕で受けとめ凌ぐ。

（なんて重い打撃なの!?!）

鍛えた筋肉なんてほとんど見当たらない、柔らかな体躯なのに。さすが反撃の蹴りを繰り出す。彼女はそれを腿でガード。足元を狙った回し蹴りも難なくかわされ、むしろ焦った大技のせいでローズの方に隙ができた。

危うく踏み潰されそうになるのを、バク転で後退。しかし逃げきれなかった。唸りを上げて飛んで来た裏拳を受

け流しきれず壁に激突。

「う……く……っ！」

背中を強打し悶絶する間も、ナース服の突き蹴りは止まらない。一打ごとにスタミナを削られ完全に防戦一方。教授に近づくどころじゃない。

「がんばれがんばれー」

その目標人物とはいえ、どちらに向けるのか、呑気に声援を送っている。なんだか無性に腹が立つてきた。

「この……私を舐めるなっ！」

ナース服の突きを左腕で跳ね上げると、一気に間を詰め右アッパーを腹にぶち込んだ。女性のお腹を殴るのは気が引けたけど、妙に強い彼女が悪い。しかし——そんな気遣いは不要だった。それどころか、助手は微動だにせず、腹を穿った腕を捻り上げる。

「あ……がつ、うああああっ!」

悲鳴が迸った。腕が折れそうな激痛に。見るからに華奢な女性のどこに、こんな力があるというのか。

「こ、この……放せ……ッ!」

思わず腰の拳銃に手を伸ばしかけ、引っ込める。いくら彼女が尋常でない強さを発揮しようと、一般人を撃つたら拉致計画が表沙汰になる。ローズは額に脂汗を浮かべ、胸元のスタンガンを取り出した。しかし、そのスイッチを入れることはできなかった。

「はい、しゅーっ」

ふざけた声と共に、甘い匂いのガスが顔を覆う。

「あ……あれ……?」

視界がぼやける。全身から力が抜けて、腕の痛みすら感じない。気を失う寸前に見えたのは、さつき落とした催眠ガスのボンベを持った、天満教授の薄ら笑いだった。

ゆっくりと、意識が戻った。まだ眠気が目蓋を重くするけど、力づくで覚醒させ、首を巡らす。正面の窓にかかっているカーテンの隙間から見える空は、まだ暗い。おそらく、あれから一時間も経っていないだろう。

問題は自分の状態。手足を広げた格好で、謎の長方形の黒いフレームに磔にされていた。手首と足首は四隅で簡状の金属製の拘束具に繋がれ、わずかな可動域もない。

「あら、もうお目覚め。このガス欠陥品じゃないの?」

背後から現われた天満教授が、呆れ顔で催眠ボンベを投げ捨てた。

「そうかもしれないわね。今度、担当者にも苦情を入れておくわ」

カラカラと転がる缶を追って視線を巡らせれば、パソコンの乗った事務机があるだけの普通の部屋。ただ、壁際に横たわる物体だけが異彩を放つ。

「……どうして、私がスパイだと?」

しかし、ここは逆にゆっくり話ができる環境だと思ふことにした。彼女の気持ちが変われば過程は関係ない。

「わたしの世界が研究室だけだと思つてたんでしょ? こう見えて意外と友達が多くてね、S国のスパイが記者会

見に紛れてるって情報があったの」

敗北感に唇を噛む。こんな素人に情報があつたなんて。

（でも、ほとんど研究室から出ない変人のどこに、そんなネットワークが）

それに、あの壁際の変な容器も気になる。見た目は酸素カプセルか日焼けマシン。しかし青く輝くその内部は、綺麗に人型にくり抜かれている。まるで、人間を梱包するかのよう。不穏な想像を掻き立てるビジュアルに、尋ねる声も震える。

「教授、それは……」

「あれは、あの娘の充電器だよ」

「この娘……?」

助手のことだろうか。そういえば姿が見えない。天満教授は、釈然としないローズの顔を面白がるような意地の悪い笑みを浮かべ、天井を指差した。釣られて見上げ、驚きの声を上げる。

「——なっ!」

天井に、しゃがんでいる。そうとしか表現できない姿勢で、助手の女性が逆さまになってローズを見下ろす。彼女は猫のように身を翻すと、床に舞い降りた。さつき音もなく現われた種明かしをされた気分だ。それにしても明らかに、人間離れたこの動き。

「驚いた?」

教授の自慢げな顔で確信する。助手は、アンドロイドだ。しかも会見で見た簡易なものではなく、まさに軍が欲しがっている、高性能の。

「自律型アンドロイドLZ1。わたし

の可愛い仔猫ちゃんだよ」

教授の得意げな声を聞き流す。それほどローズは高揚していた。想像以上の代物の出現に。あの格闘センス、強靱なボディ。なるほど軍が欲しがるところに。これがあれば、緊張状態にある隣国に対し、S国は間違いなく軍事的に圧倒的優位に立てる。

「教授! ぜひ我が国に! どんな待遇も約束しましょう。S国は間違いなくあなたを歓迎します!」

しかし教授は、興奮気味のローズの申し出を、あっさり一蹴した。

「お断りだね。だいたい、誘拐犯の言うことなんて聞かなくていい」

「我が国に来ていただければ、その考えも変わります!」

過程は問題じゃない。行けば最高のもてなしが待っている。そんな必死の訴えにも彼女は一切耳を貸さない。むしろ、価値観を共有できないローズを憐れむように薄ら笑いを浮かべた。

「だから無駄だつて。別にS国だからじゃないよ。この娘を戦場で使おうなんてところは一切交渉しない。わたしは争い事が大嫌いなんだ」

「軍事利用でないなら、どうして教授はこんなものを……」

「そんなの決まってるじゃん。世界平和のためだよ!」

「せ……世界平和?」

唐突に湧いて出た能天気ワードに目眩を起こす。この兵器にしか見えない



纏った者の姿 気配を  
完全に消してしまふ

かつて父上が  
暗殺集団「ニンジャ」  
より奪いし  
マジックアイテム

武人の誇りを汚す物として父上に使用を禁じられた禁忌だ

魔法の使えるように  
なれたのに

ナイア様がようやく



私は素直に  
喜ぶ事が  
できなかった



この男の

私には  
どうしても...

ゲッ  
ゲッ  
ゲッ  
ゲッ

お許し  
ください…

ナイア様！  
父上！！

せいで

この禁忌を  
用いて真実を…

ヤツの正体を  
この目で  
確かめる事を!!

エルフの国の宮廷魔導師になれたので  
姫様に性的な悪戯をしてみた THE COMIC

第5話

ときまるよしひさ 原作 磯貝武運  
漫画 時丸佳久 [キャラクター原案]  
成海クリスティアノート



原作・二次元ドリーム文庫  
1～2巻好評発売中!

はい

では始めて  
ください

アタマ

いまから  
炎の魔法を  
使います

はあ

ヤリマン  
エルフ

セイムラッド王国  
国王マシユアの娘…

ナイアです





ゆっくり  
おちついて！

は…  
はいっ

グーン

ザッ



いいですよ  
掌に力を  
入れて！

れもっ…

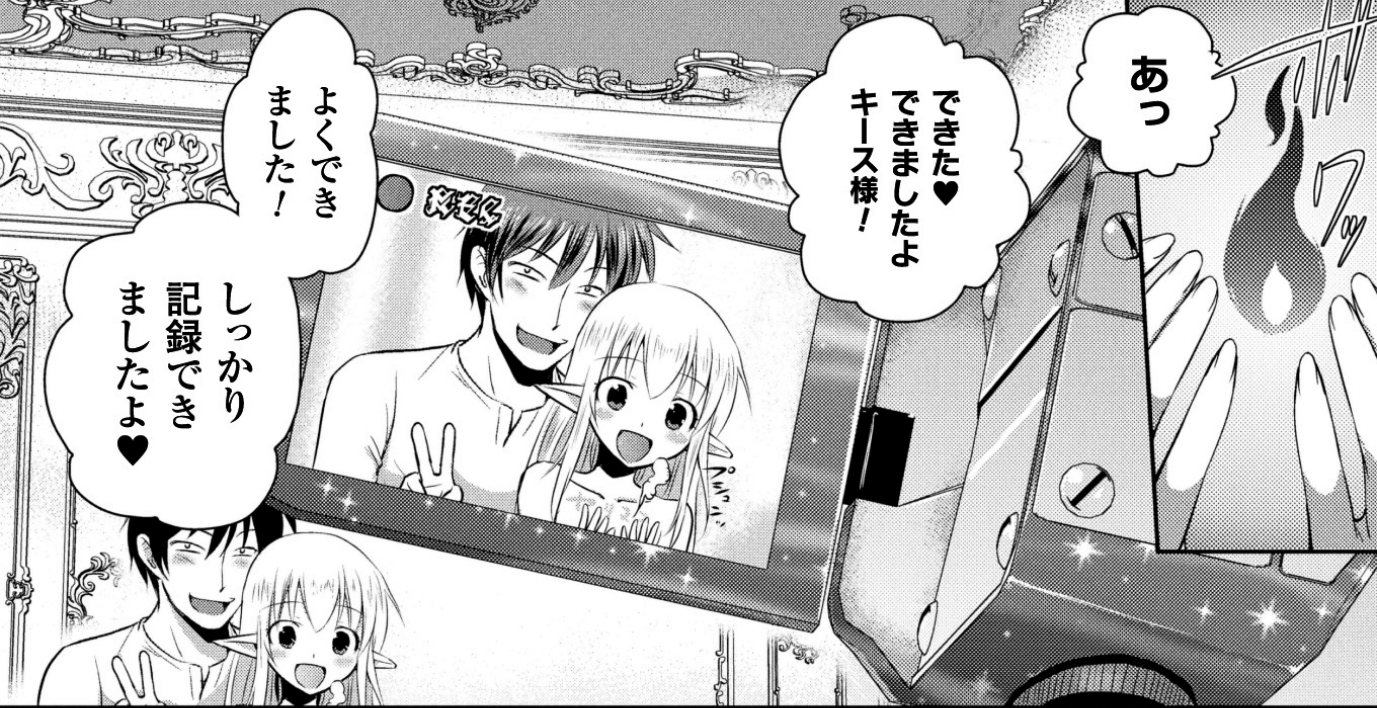
気持ちいいのを  
魔力に換えるの  
ですよ！

これでは  
集ちゅー  
できまひえんっ

スイ

ひゃあ



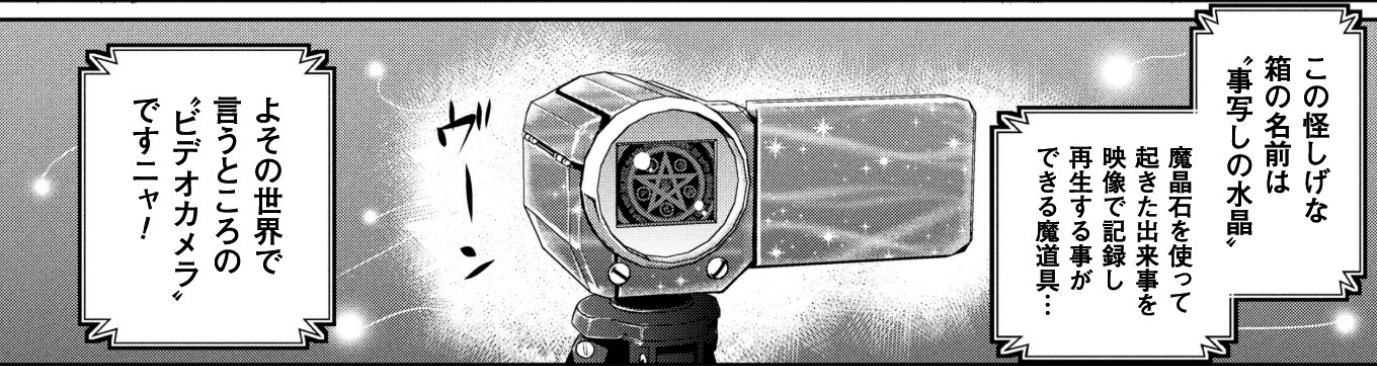


あっ

できた♥  
できましたよ  
キース様!

よくでき  
ました!

しっかり  
記録でき  
ましたよ♥



この怪しげな  
箱の名前は  
「事写しの水晶」

魔晶石を使って  
起きた出来事を  
映像で記録し  
再生する事が  
できる魔道具…

よその世界で  
言うところの  
ビデオカメラ  
ですニャ!



…で  
いつものように  
だまされちゃった  
お姫様

これはなんど  
話してるのよ

では  
姫様♥

お教えした  
とおりに

…やっぱり  
やらないと  
いけませんか?

恥づかしい  
です

おちんぼ  
魔道具除去  
研究の為  
お願いします!

清らかなお体に  
東洋のレアな文字で  
落書きまで  
されちゃって  
撮影されているので  
ありましたニャ



ゲゲゲ

…次は  
おちんぽに…

魔力を送るところを  
記録していただきます

がんばって  
姫様!!

うう…  
あー

カッ  
ハッ

また  
姫様

でーす

中出し  
OK! →

長持ち  
いいよ!

70  
00  
00

ゲゲゲ

で…

中出し  
OK! →

ここが  
わたくしの…

そうじゃ  
ないですよ  
姫様♥

…ナイアの  
赤ちゃんが出て  
くる所…

おまんこです

ぬ  
ちやあ

き…  
今日は

純潔なる女騎士の  
心身を墮とす  
淫液飛び散る  
スレイブ調教！

# 騎士 メスロザリアの 七日間

小説  
NOVEL

ひととせあらた  
一年新

挿絵  
ILLUSTRATION

このまさお  
河野雅夫



◆◆序◆◆

聖王国より海を越えた彼方、暗黒大陸と呼ばれる地に入植が始まってから数世代。邪悪な魔族との戦いが始まったのは、おおよそその頃だ。

領主たち、そして聖王国の神教会は自分の兵士に加え、ならず者、食い詰めた傭兵など犯罪者まがいの荒くれ者に魔族討伐の聖なる任務を与え、「冒険者」として送り出した。「攫千金を夢見る若者たちは海を渡り、ある者は財を成し、多くは命を散らした。これは、そんな開拓の時代に起きた一つの物語。

◆◆一日目◆◆

【ランナン】

狩りから戻ってきた父が呼んでいる。僕……魔族の一部族を治める首魁の子であるランナンは、面倒だと思いつつも父の下に向かう。どうせ、人間との戦いの後始末の話だろう。面倒くさい。

人間との戦いは面白い。たまにすごく強い奴もいて、殺されるかもしれないギリギリの戦いは血がたぎる。だけど、帝王学とか政治とかは正直面倒くさい。

父には数人の妻とつと多くのメスがいて、子は僕の他にもいるのだから跡継ぎは他の奴に任せればいいのに。

「ランナン、来たか」

見れば、同年代の兄弟も呼ばれている。生まれた腹は全員違って、僕をライバル視している奴もいれば、友達扱いしている奴もいる。

父の配下である古株のオーガが、僕の前に簪巻きになった何かを持ってきた。

臭いからすると肉……生きている動物だろう。

よく見ると、鎧を身につけた人間の雌だった。怪我をした狼みたいに、おびえと警戒を含んだ目でこちらをにらんでいる。

目があつた瞬間に、人間の雌の表情が一瞬驚いたように変わった。

……僕の外見は、他の兄弟に比べて迫力が足りないことはわかつていて、僕を生んだのは半分人間、半分妖精の女であり、どちらかというと母に似て女っぽい顔立ちなのだ。

「今日の獲物だ。それぞれ一匹与える」

父の言葉に、怪訝な顔をする。人間なんかもらつても、オークたちにやるか狼に食わせるくらいしか使い道がない。しかも、自分が奪い取ったものではないから愛着もない。

見れば、他の兄弟たちの足下にも同じような人間のメスが転がっている。

人間の神を信じてちっぽけな奇跡を起こす神官、魔族のまねをしてちっぽけな魔法を使う魔術師。力の強そうな戦士。全員雌で、たまに刈り取る人間

としてはそこそこ珍しい奴も混じっている。

僕の足下に転がっているのは、金属鎧にくるまれているから戦士か騎士。たぶんありふれた奴だ。

「……で、なんでこんなものを？」

そう聞いたのは僕ではなかったけど、僕も同意見だった。

「おまえたちもいずれば人間と戦うし、人間を支配下に置くこともある。七日後までに、おまえたちはそいつらを自分の奴隷として教育しておけ」

……は!?

ちよつと待つてほしい、七日間もこんな雌に付きつきりで、しかもわざわざ教育しなければいけないのか。本当に面倒くさい、ため息が漏れる。

驚いていると、足下で雌が声をあげた。

「ふざけるな……私たちは神より賜った使命を果たすために生きている。貴様たち邪悪な魔族の手下になどなるものか!」

人間の言葉は多少の語彙の差はあるけどだいたい通じる。この状態でも吠えることができるのはまあいい。健康そうだし肉付きもいい、強気そうで顔つきもまあ人間の中では平均を超えているだろう。とはいえ、他の雌もそれにあわせてギャーギャー言い始めたのは少しうるさい。

「なるほど……ランナン、競争だよ。誰が上手にこいつらをベツトにできるかな?」

隣からかかる声に、気が重くなる。足下では僕や周囲のみんなを罵る雌の声。ああ、面倒くさい。

【ロザリア】

魔族の卑劣な罠にかかり、私たちは捕らえられた。

半数は戦いの中で倒れ、生真面目な従軍司祭のマリアンヌ、恩赦を求めて同行している死刑囚であり魔術師のカレン、血気盛んな女傭兵バニラ、そして小隊を預かっていた騎士の私ロザリアは捕らえられ、こうして魔族の慰み者になることになったのだ。

武器は奪われた。しかし、マリアンヌもカレンも、装備がなくとも奇跡や呪文を呼び起こすことができる腕利きだし、バニラと私はそれなり以上に鍛えている。

誰か一人でもこの現状から抜けだし、みんなを救出して基地まで撤退できれば野蛮な魔族など皆殺しにできる。

そうすれば、実家である貧しい土地しか持たない弱小領主ではなく、豊かな新大陸の領地を勝ち取ることもできる。

そのため、まずは自分を「与えられた」と思いこんでいるこの魔族を……と、睨みつけるように見上げた私の思考が止まった。

間違ひなく魔族だ。高位魔族の血を引いている証拠に、あのおぞましい山羊のような角がある。

が、その下にあるのは少年の顔、そして少年の体だ。まるで教会にある宗教画の天使のように美しい。

戸惑う私の耳に届いた少年の声は鈴を鳴らすように美しかったが、その内容は「……え、面倒くさい」だった。

可愛い顔をしているからといってふざけるな……やっぱり、魔族は許すことができない。いつか泣かす。

運ばれたのは、ランと呼ばれる少年の居室だろう。あの広間までの道は大まかに覚えていたが、仲間がどこに連れていかれたのかまではわからない。この少年から何か聞き出すことはできるだろうか。

手足を鎖でつながれたまま、床に転がされた状態だが、怪我は軽傷。まだ暴れるだけの力は残っている。最悪、この魔族の少年を捕らえて人質に……。

「何を考えているかわからないけど、君は殺さなくても捕らえられる程度の強さだった……。だから生きてここにいてことを理解してね？」

その一言と共に、少年は片手で私を持ち上げる。破損したとはいえ、細身の女一人くらいの重さはある金属鎖を身につけた私をだ。つかまれた肩当て

が軽く軋む。

少女のような可愛らしい顔に、気だるげな表情が浮かぶ。

「本当は君なんか放っておいて、狼の世話や狩りをしている方が楽なんだけどもね。これも命令だ、早いところ従順なメスになってほしいな」

ふざけるな！　そもそも私は王国の騎士として家を継ぐ身だ。魔族なんかこの身を自由にさせてたまものか。

その言葉を伝え終わる前に、体が宙に浮く。少年が私の体を投げ出したのだとわかったときには、背中から受け身も取れずに床に落ちていた。呼吸が止まる。

「……暴れると面倒だし、殺しちゃってもまずいからね。まずは動けないようにしようか、おねーさん」

ゆつくり歩いてきた少年は、私の鎖の胸当ての継ぎ目を両手でつかむ。まるで紙を破くような気軽さで金属の鎖が引きちぎられる。

はがれた部分から、右肩に手をあてられた瞬間に激痛が走る。思わず叫び声があがり、腰と足がはねる。強制的に脱臼させられたのだとわかったのはその後だ。

「狼というよりも、魚みたいなはね方だね。まあ、体は頑丈な方が扱いが楽でいいかな。寝とか……ねえ……面倒くさいけど、少しくらいはやっておかないとね。雌を犯すのは嫌いじゃないけど、さ」

淡々と、まさに釣った魚を締めるよ

うに少年は私の左肩を脱臼させる。

せめて蹴り飛ばそうと足を振り回すも、鉄鎖ごとつかまれ押さえ込まれる。

こんな女みたいな顔の少年に、完全に腕力で負けている。魔族は血統によつてさまざまな力を持つというが、これほどのものなのか。

今まで鍛錬してきたことはいったい何だったのか。痛みと悔しさで目がにじむ。

「あ、ちよつといい顔になってきたね。おねーさんさ、名前なんて言うの？　今までに何人くらい子を産んでる？」

少年はいつの間にかズボンを下ろして

いた。両足をつかんだ状態で、器用に脱いだのだろう。思わず少年の顔を見ようとして、その顔の下に見える屹立した男性器が目に入ってしまう。な

にあれ、えぐい形してる。殿方のアレはあんなふうになるの？！

「ねえ、答えてよ。そんな顔を真つ赤にして目をそらして……。つて。もしかし」

答えない。答えられるわけがない。この身はいずれそれなり以上の血筋の貴族や実力ある騎士に捧げるために清く保つていたものだ。それに婚前交渉なんていう邪なことは神の教に背くし。

少年は楽しそうに、私の足を持ち上げて大きく開く。少年の尻尾が器用にスカートをはだけさせ、ショーツをちぎる。

え、待って、そんな大きい入るわけな。

ブツリと音がした気がする。さっきの肩の痛みとは違い、引きちぎられるような、ねじ込まれるような硬い痛みが突き刺さる。思考が乱れる。痛い。

少年が何の前触れもなく、男性器を私に突き刺し……つまり、犯したのだ。足を閉じようにも少年の腕にがっちりつかまれていて、大きく開かれたまま動かすこともできない。力が入らない。痛い。

「……濡れてないなあ、なんで？　やっぱり処女だから？」

きょとんとした顔で、少年がつぶやく。それでも、強引に腰を打ち付けてくるたびに引つ張られるような、内蔵をえぐられるような痛みが響く。

「あははつ、その顔はいいね。面倒くさい仕事だけどもちよつとだけやる気が出るよ。でも、僕がいいだけだと調教にはならないかな？」

痛みと悔しさで、思考もまとまらない。気がつけば、私はただ泣きながら少年に許しを求めている。……騎士である私が、魔族であるこの少年に。

どれほどの時間がたったのだろうか。気がつけば今まで誰にも許したことのない私、私の膣は蹂躪され、おぞましい魔物の精液を注がれていた。

快感などどこにもない、痛みと恥辱だけの処女喪失。それが、捕らわれて一日目に私が経験したこと。





異民族の侵攻を食い止める息の合った二人！  
その前に裏切り者のカシムが現れ……

# 魔剣士 リネ2

乙女穢されし戦場

【第7話】穢れども剣は折れず

原作／まくらカバーソフト  
小説／酒井仁 挿絵／桐島サトシ



1

「てつ、撤退しつ！ 引けえつ」  
ずしやああつ。ヒツピアの指揮官がアレスの剣に斬り伏せられ、敵陣はたちまち総崩れとなった。

逃げ惑うヒツピア軍に勢いづくハイランド兵たちを、アレス將軍は厳しく制した。

「深追いをする必要はない！ 直ちに負傷者を後方に、被害状況知らせ！」  
兵士は勝ち鬨を上げるが、アレスの顔は浮かない。

（ノースブリッジ砦で奴らを撃退した後、明らかに奴らの動きに変化が生じている。やはりトリスタンの一件が）

トリスタン公国はハイランドの同盟国である砂漠の小国。だがグスタフがストームランズに侵略の目を向け、国が乱れている間に、トリスタンはヒツピアの侵略を受けていた。

本来ならグスタフは援軍を差し向けるべきだったが、私欲に走ったグスタフは砂漠の小国を放置した。

「アイザック公……俺がもう少し早く駆けつけていれば」

トリスタンの領主アイザックとアレスは旧知の仲である。それゆえ、トリスタン滅亡の報告は、アレスにとってショックであった。

「アレス。ずっと要請していた物資がようやく届いたよ」

エルヴィンの報告に、若き將軍はほうと一息ついた。そんな朋友を見る金髪の騎士の目は優しい。

「エルヴィン、すまないが国境周辺の防衛網を見直してくれないか。再編成の必要がありそうだ」

「わかったよアレス。ただ、物資の補給は届いたんだが、増援はまだ望めそうもないようだ」

「うむ……」

正式に聖王の座に就いたバロック王は、ヒツピアの侵略を防いでいる前線のアレスたちより、後宮作りにご執心だという話だ。

聖王の血筋を絶やすまいという考えは十分わかるのだが……。

「幸いに、ヒツピア軍は以前のような大攻勢を仕掛けてこなくなった。というより連中、なにか焦っている」

「それは僕も感じたよ。トリスタンを征服した割には余裕がない。ただ、それだけに戦線が拡大して、こちらの手が足りないよ」

現在、戦線は伸びきっていて、要所に兵力を分散させているものの、決定的な打撃力に欠ける。ランドルフ騎士団長か、ヘステシアの魔導士のような守りの要が欲しいところではある。

（あるいは……）

アレスの脳裏に一人の少女の顔が浮かぶ。美しい金髪に引き締まった肢体、凛々しい眼差し、カリスマを感じさせる鋭くも気高い聖剣技。

ストームランズの若き女王リーネがいれば、この戦はずっと楽になるだろう。駄目もとでリーネを増援に寄こしてほしいという要請は出しているが、

バロックがおいそれとあの美少女を手放すとは思えない。

と、そのとき——あどけなさを残す僧侶服姿の少女が、満面の笑みでこちらに駆けつけてくるのが見えた。

「アレスにいきま、エルヴィンさま！」

「どうしたミュリエル。負傷兵の手当では……あつ」

妹の背後から姿を現した少女に、アレスは息を飲む。まさにいま脳裏に描いていたツインテールが、風になびいていた。その目は相変わらず生気に満ち、輝いている。

「国境防衛の任、ご苦勞ねアレス將軍。あたしが来たからには、百人力よ！」

「……リーネ!!」

リーネ率いる兵士数百名および追加物資を得て、ハイランド軍の士気は大いに高まったのだった。

斥候からの報告通り、迫りくるヒツピア軍はかなりの規模だった。

士気も高く、先陣を切る禿頭の巨漢はヒツピアでも勇猛と名高いマンズール將軍である。このときアレスたちはマンズールがトリスタンのカーラ王女を陵辱し、性奴隷としたことまでは知らない。

「ふん、相手にとって不足はないわ。みんな、ストームランズの誇り高き剣を見せつけてやるのよ！」

金髪を揺らす少女に、兵士たちの意気も上がる。剣の冴えはアレス將軍にも引けを取らぬというストームランズ

の女王リーネ。その強さとカリスマの影響力はそれほどのものだ。

かねてよりの打ち合わせ通り、リーネ率いるストームランズ軍が正面からマンズールを迎え撃つ。

数の上ではやリーネ側が不利。騎馬による電撃戦を得意とするヒツピア兵が、地鳴りと共にストームランズ軍に襲いかかるうとしたとき、リーネの号令一下、兵士たちは踵を返す。

「ぐわっはは、臆病風に吹かれたか小娘！ このまま蹴散らして、お前も俺さまの肉便器にしてくれる！」

マンズールの指揮能力は決して低くはない。前線で勇猛を振るうヒツピアの男は戦況を読む術に長けている。

だが、アレスは既にヒツピア軍の異変に気付いていた。彼らが「なにか」に追い詰められ、後がないことに。

どどどどどど……。

「み、右後方より敵襲ッ！」

「なにいいいつ、伏兵だと?」  
アレスは既にこの辺りの地形を把握し、ヒツピア側から発見されにくい場所に兵を配置していたのだ。混乱するヒツピア軍に、今度は再び転身したリーネ軍が突っ込んでくる。

「セイクリッド・フォールッ！」

聖なる光が空を割き、ヒツピア兵数名が吹き飛ばされる。初手での大技をまともに食らったヒツピア兵はさらに混乱、そこにアレス率いる強襲部隊が追い打ちをかける。  
「はあああああつ！ やああつ」

銀光が閃き、たちまち数名が斬り伏せられる。数の上ではこれで五分、しかしヒッピアの統制は完全に崩れる。

「おのれ若造！ でやああああ！」

巨大な剣をやすやすとかわし、すぐに嵐のようなラッシュがマンズールを襲う。禿頭の巨漢は顔を歪め、ヒッピア兵は次々と討ち取られていく。

「ストームランス各騎陣形を崩すな！ 確実に包囲を縮めるのよ！」

（うむ、的確な指揮に、以前以上の剣の冴えだ、さすがはリーネ）

援軍を出し決っていたバロックだが、その間もリーネは研鑽を惜しまなかったのだらう。少女とは思えぬ剣気に、アレスの血も滾る。

「逃げるか、マンズール！」

「くっ、て……撤退だ！」

統制を乱した時点で、既に勝負は決していた。敗走を始めるヒッピア軍を、アレスは追撃しなかった。

「アレス、どうして追わないの」

「奴らは明らかに消耗していた。まるで俺たちの前に何者かと一戦交えていたかのような……トリスタンの残党、いやそんなものじゃない」

それ以上の確信はアレスにもなかったが、アレスは胸中に嫌な予感を覚えていたのだった。

下品な男たちの笑い声で目が覚めた。ばちばちと火のはぜる音と炎の熱で顔が火照る。

「う……………」

うつすらと目を開けると空は暗い。自分が後ろ手に縛られていることに気づくと、リーネの記憶が一瞬で甦る。

「おっ、お目覚めのようなだ」

杯を叩いた若い男がリーネの顔を覗き込み、にたりと笑う。忘れたくとも忘れられない。傭兵ホークの名を騙り、義勇軍に取り入った拳句、聖王ルイトヴィッヒの命を奪った怨敵だ。

「あんたは……ッ！」

どうしてリーネがこの男に囚われているのか——ヒッピアの再侵攻を察知したアレスたちは、小咥を利用する作戦を立てた。

そこにエルヴィンの率いる精鋭部隊を配置し、防衛戦に持ち込むふりをして、アレスの部隊が奇襲をかけ、ストームランス軍がとどめを刺す。

これはリーネの強い希望。なぜならヒッピア軍を率いているのはカシムだったからだ。いわばこれは、ルートヴィッヒの弔い合戦。

（それなのに）

作戦に不備はなかった。だが、ヒッピア軍を率いるカシムは鬼神のごとき強さを見せ、小咥はたちまち陥落した。エルヴィンは咥を放棄するしかなかったのだ。

「あいつ、まともじゃない……エルヴィン、アレス、ここは撤退よ、あたしがしんがりを務める！」

「リーネッッ」

「カシム、覚悟お——ッ」

リーネは怒りと共に聖剣技を繰り出した。だが、カシムの身体が不気味なオーラを放つと同時に、聖剣の光は打ち消された。リーネはあっけなく打ち倒され、捕虜となつたのだった。

「こうなると剣の女王もただの小娘だな、くっくくく」

そう言つてリーネの顎に指をかける。強化服はまだ脱がされていないが、辱める手段ならいくらもある。

「カシムさま、そいつ早くヤッチまわねえんですかい」

「焦るなよ、俺は義勇軍に潜入中、この女の戦いを間近に見てきた。女とは思えない強さと気位の高さだ。まだ生娘なのは間違いないねえ」

息が触ればかりに顔を近づけるので、リーネは顔を背ける。

「明日の朝、ハイランド軍の、いいやアレス將軍の目の前でお前を颯りものにしてやるぜ。そのほうがヤツも悔しがるだらうからな、はっははは！」

その勝ち誇つた顔に、リーネはほぞを噛むしかなかった……。

翌日、見通しのよい平原で両軍は相対した。数の上ではハイランドが圧倒的、そしてハイランドの下には多数のヒッピア兵の捕虜がいた。

「カシム將軍！ 捕虜の交換を提案する!! リーネを解放しろ！」

対するカシムの元には両手を縛り上げられた金髪的美姫。ストームランスの女王は人質としては申し分ないが、

戦力差からしても、ここは捕虜を取り戻し、戦列を立て直すのが定石。「いいだらう。では先にこちらの捕虜を解放してもらおうか」

アレスの指示で、ヒッピア兵が自軍の元に向かう。が、カシムの右腕からおどましい紫色の光が立ち上つたかと思うと、それは解放された捕虜たちを薙ぎ払つたのだ！

「ぎゃっ」「ひいつ」「な、なぜ……」

「我が誇り高きヒッピアに、捕虜となる腰ぬけなど必要ない！」

「カシム、貴様ッ」

ふん、とアレスを鼻であざ笑うや、リーネの胸元を掴み上げる。そしてただの一振り、リーネの強化服を薄布のように引き裂いたのだ。

「きやあああああつ」

強化服をいとも容易く破壊するカシムの力。アレスの脳裏をよぎつたのは、オーウェンが振るっていた魔剣。

「わはははは、見たか。もうマンズールやアクラムなど敵ではない。この力を持つて俺がヒッピアの、いいやこの大陸すべてを手に入れる！」

ヒッピア兵さえ、カシムを遠巻きにして怯えている。その股間の布がぱりぱりと裂け、巨大な肉の凶器が姿を現した。

「は、放せ、放して……ああつ」

片乳を露出させられたリーネの腰を、カシムの手が這いまわる。ぱきりぱきりと腰を保護する甲冑が碎かれ、スカートを大きくめくり上げられると、真





ぐいと上半身を起こさせる。立ちパツクで無残に貫かれる乙女の姿を見せものにしていうのか。高笑いをしながら激しく腰を振り立てる。

「リーネッ、いま助けに……ッ」

「弓兵、前に！ リーネさまには当てるなッ」

キース率いる弓兵の腕は確かだが、カシムは少女を盾にしているのうまく狙えない。牽制のためにヒツピア兵にも矢は向けられるが、カシムは味方の兵のことよりリーネを陵辱することを愉しんでいた。

「うっ、うぐうっ、ああ！」

「ひひひひ、いい具合だぜ女王さま。女だてらに剣を振り回すだけあつて、まんこの締まりもなかなかのもんだ。こんなじゃすぐにザーメン漏らしちゃうかもなあ〜」

その言葉にさつと青ざめるのはストームランスの兵士たち。

目の前で女王を犯されただけでなく、敵将の子種を植え付けられるなど、誇り高きリーネにとっては自死すら選びかねない恥辱。

「うわあああつ、リーネさまをお救いしろおつ」

一斉に斬りかかってくる兵たちを、腕の一振りで薙ぎ払う。

「駄目、やめなさい！ あ、あたしなら……だ、だいいよう……あああつ」

だが、屈辱に震えているのはリーネだけではない。

（リーネ、これまで何度も前線で勇敢

に戦い、危険な目にも遭ってきた。いまも目の前であんな恥辱を受けているのに、俺は何もできないのか！）

だが相手はリーネの聖剣技をも打ち破る魔の力を持つている。何度も斬りかかろうとするものの、アレスの剣は届かない。

「おっ……なんだかまんの奥が熱くなつてきやがつた。こいつは高貴な王族とも思えない、相当なドスケベまんだな」

「う、うるさ……あひいっ」

だが、リーネの反応に変化が生じているのは誰の目にも明らか。

子どもの腕ほどもある巨根で、膣奥を突き上げられるたびに膝が痙攣しているのは、愉悅ゆえ。内臓を圧迫される衝撃に歪む乙女の顔には、快楽の色が浮かんでいた。

「リ、リーネ……」

衆人環視の中、憎き敵将の陰茎に犯されているにもかかわらず、リーネの目元は赤く染まり、「あひ、はひっ」と喘ぎ声が漏れる。

「強がったところで所詮小娘、強い牡の前じゃお前はただの雌豚だ……味方の見ている前で、その正体をさらけ出してやるぜ！」

「や、やめ、んくううう……っ」

漏れ出る喘ぎ声を堪えようと必死に唇を噛みしめる。だが猛烈なピストンを浴び、金のツインテールを振り乱さずにはいられない。

ぐちゅっ、ぐちゅ、じゅぼぼっ。少

女の内腿を伝う透明な汁は、リーネ自身分泌した愛液。リーネの意志に反し、その女体はカシムの陵辱を受け入れ、悦楽に反応する。

「やめ、も、もうこれ以上は」

「何を言っている、お前はこれからカシムさまの子種を子宮に注がれるんだ。何もできない無能將軍に見守られながらな！ ひやははははは」

ぶしっ……ぶしやあああつ。

強烈な一撃を食らった瞬間、リーネの股間から盛大に飛沫が飛んだ。辺りに漂う潮の香り、それは剣の女王が陰茎に届いた証。

がくりと膝が折れそうになるところを抱えあげ、さらに強烈な突き入れを食らわせると、リーネは首をのけぞらせて激しく戦慄した。

「リーネ、気をしっかり持つんだ！ 弓兵、回り込めッ」

「あ、アレス……あたし、も、もう」

ぶしやっ、ぶしやっと断続的に潮を噴き出す少女の顔は紅潮し、もはやアクメに達する寸前。

アレスはカシムの放つオーラに腕を灼かれながらも斬りかかるが、カシムの陵辱は止まらない。

「諦めな、メスブタ女王さま。まんに

の奥がさつきからひくひくして、俺のちんぽを締めつけっぱなしだ。その子宮にたつぷりとザーメンを流し込んでやる……絶望しながら、俺さまの子を孕めええッ！」

「ああダメ、いく、イクううっ！」

ずずん、とカシムが腰を突き上げると同時に、リーネの爪先が浮き上がる。深々と突きたつた陰茎から濃厚な精液が迸り、リーネの腹を満たしていく。

リーネは抵抗する気力もないのか、ただがつくりとうなだれる。

「あ、あ、熱い……」

どくっ、どくん、どくん……放出が続く間中、アレスも、エルヴィンもミュリエルも、そして大勢のストームランス兵もリーネが穢されるのをただ見ていることしかできなかった。

「まだまだ、こんなもんで済むと思ったら大間違いだぜ、アレス！」

「かは……っ」

ぐうん、とリーネの二の腕を掴んだ状態で、カシムが大きく身をのけぞらせた。するとリーネの身体は完全に浮きあがり、貫かれた股間の一点で支えられた状態。

魔の力を得たカシムの陰茎はさながら磔刑台のごとくにリーネを晒し上げ、ずごんずごんと真下から少女の子宮を突き上げ続ける。

「おらおら、もう一発だ！」

びゅるるっ、びゅるるる……っ。

抽送を続けながらの二発目の射精にリーネの身体が戦慄く。

少女の下腹が妊婦のように膨れたかと思うと、股間から勢いよく白濁の粘液が迸り、大地に滴り落ちる。

「ああ？ まだおねんねには早いぜ女王さま」

しかしリーネの首はがつくりとうな



この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**